

東京のランドデザイン検討委員会（第2回）

平成27年8月6日

【前田副知事】 ただいまから第2回東京のランドデザイン検討委員会を開会いたします。私は、進行役を務めさせていただきます、東京都副知事の前田でございます。よろしくお願いいたします。

本日は、東京のランドデザインの検討に向けた有識者・専門家の皆様との懇談を行いたいと思います。そういうことで各分野の第一線でご活躍の8名の皆様にご出席を頂戴しております。ご多忙の中、誠にありがとうございます。

それでは、ご出席の皆様をご紹介申し上げます。

まず、まちづくりの分野では、東洋大学理工学部建築学科専任講師、株式会社藤村龍至建築設計事務所代表の藤村龍至様。

【藤村様】 こんにちは。よろしくお願いいたします。

【前田副知事】 同じくまちづくりの分野で、株式会社オープン・エー代表取締役、東北芸術工科大学建築・環境デザイン学科准教授、馬場正尊様。

【馬場様】 よろしくお願ひします。

【前田副知事】 医療福祉の分野では、筑波大学大学院人間総合科学研究科教授、久野譜也様。

【久野様】 久野でございます。よろしくお願いいたします。

【前田副知事】 芸術文化の分野では、遠州流茶道、小堀優子様。

【小堀様】 よろしくお願ひいたします。

【前田副知事】 ビジネスの分野では、株式会社ロフトワーク代表取締役、MITメディアラボ所長補佐、林千晶様。

【林様】 よろしくお願ひします。

【前田副知事】 同じくビジネスの分野で、グーグル株式会社執行役員営業本部長、早稲田大学大学院ファイナンス研究科非常勤講師、仲條亮子様。

【仲條様】 よろしくお願ひいたします。

【前田副知事】 続いて、働き方の分野では、株式会社スプリー代表、コラムニスト、安藤美冬様。

【安藤様】 よろしくお願ひします。

【前田副知事】 科学技術の分野では、東京大学大学院工学系研究科准教授、松尾豊様。

【松尾様】 よろしくお願ひします。

【前田副知事】 以上の皆様でございます。ありがとうございます。

なお、東京都出席者につきましては、恐縮ですが、お手元の座席表をもって紹介にかえさせていただきますと存じます。よろしくお願ひいたします。

それでは、懇談に当たりまして、まず、舛添東京都知事からご挨拶をさせていただきます。

【舛添知事】 皆さん、こんにちは。お暑い中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。

この委員会、1回目を開きまして、大変活発な議論で、時間がいくらあっても足りないなど思っていますので、今日もたっぷり時間はとってありますが、皆さん方がお書きになったもの、それから今日発表なさる資料を事前に読ませていただきましたけど、それぞれの分野でご活躍なさっているの、本当に心強く思います。

昨年末に今からの10年後の東京の姿というので長期ビジョンを出しましたけれども、それでは足りないの、30年、40年後ということで、2040年代ぐらいまでを見据えた、特に若手の皆さん方の意見を入れたグランドデザイン、2040年代、東京をどうすればいいか、ハード・ソフトを含めて、そういうご提言をいただきたいと思っています。5年後にはオリンピック・パラリンピックが開かれますけれども、世界一のまちにしようという大きな野心を抱いてやっているところであります。

色々な問題点があると思ひますけれども、今日は、皆さんご専門で、本当に楽しいプレゼンテーションをいただけるなど思ひて楽しみにしていますし、久野譜也先生は、もう少し早くこういう会議を開いていると、私は股関節の手術をしないで済んだのではないかな。本は、股関節悪くなってから読んだものですから、それで手術も終わっていたので、終わったって変ですけども、そういうことも含めて、自分でそういう経験していると、私は団塊の世代なので、何百万人という団塊の世代が今から出てきて、これが歳をとってくると、色々なところが故障したりするので、いつも申し上げるんですけども、手術した後、歩道橋というのはこんなに邪魔なものであったのかと。だって歩道橋を上がるエネルギー、下がるエネルギー、階段上り下りのためにリハビリの時間が長くなったわけですから、そういうことを考えると——と言うと、小さな子供を持ったお母さんたちは、歩道橋を残し

てくださいと。たとえ信号が青になって行っても、暴走した車が来たら交通事故になってしまう。子供たちは元気だから、歩道橋を上り下りすると、絶対に車にひかれることはない。そういう意見が色々ありますので、例えば歩道橋一つとっても色々な見解があると思っています。

それで、51年前のオリンピック・パラリンピック東京大会のときは、戦争に負けた日本が元気になるために高度経済成長に向かっていったときですけど、少し今回とは違うかな。生活のゆとりとか、健康とか、趣味とか。小堀さんがいらして、この前、おいしいお茶を立てていただきましたけれども、お茶というのは日本文化の集まったものなので、そういうことを含めて、我々ワーク・ライフ・バランスということを行いますけど、生活も趣味も仕事もバランスとってやろうではないかということであって、趣味で生きていくというのもいいでしょう。

私がいつも申し上げるのは、伊能忠敬というのは引退して、天文学を勉強してあれだけの地図をつくった。歌川広重というのは江戸の消防士だったんですね。それであまりに絵がうまいもので、やめてからあれだけ素晴らしい五十三次ができたということなので、そういうことを考えています。

それからもう一つ、今日私、外を走っていて感じて、今日はちょっと混んでいるんですけども、最近、首都高速、非常に流れが良くなったと思われませんか。というのは、中央環状線が開通するとこれぐらい、たった5%しか車の量は減っていないのに、渋滞が5割減っているということで、世界でまだどの大都市もやっていないのは渋滞のないまちづくりなので、これをやりたいということで、今、世界中の市長さんたちが来ると、うちが先にやるからというようなことを申し上げています。

あと、やはり経済が良くないといけませんから、科学技術、経済、こういうことも考えないといけないと思いますので、色々な観点から、本当に皆さん方、素晴らしいお話を伺えると思って、今日は、昨日の夜これを見ながら、うれしい気持ちで参りましたので、全く自由に忌憚のない意見をいただいて、意見交換をしたいと思います。どうかよろしく願いいたします。ありがとうございます。

**【前田副知事】** ありがとうございます。

それでは、本日の進め方についてご説明申し上げます。

次第をご覧いただきたいと思いますが、「2040年代の東京」をテーマに、お手元の次第の名簿の順に有識者・専門家の皆様からご意見・ご提言をいただきます。その後、出席者全

員での意見交換を行います。

時間は全体で2時間を確保してございますが、出席者の方が8名いらっしゃるということと、それから、後半の意見交換の時間をできるだけ多くとりたいと考えておりまして、発表は、大変恐縮ですが、お一人当たり7分程度ということで、ぜひともよろしく願いいたします。

**【舛添知事】** 短いですが、すみません。

**【前田副知事】** 恐縮です。発表内容の補足、また、質問等があります場合は、後半の意見交換の時間をお願いできればと思います。

ご説明の際には、皆様からいただきました資料を、皆様から見て左手のディスプレイに投影いたしますので、お手数ですが、会場前方のディスプレイのほうに移動していただき、パソコンの操作をお願いしたいと存じます。

それでは最初に、まちづくりの分野でお越しいただきました藤村龍至様より、ご説明をお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

**【藤村様】** それでは、始めさせていただきたいと思います。

皆様、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました、建築・まちづくりの分野で活動しております藤村と申します。どうぞよろしく願いいたします。

私は、「朽ちる東京から考える」と題しまして、東京を前向きに「動かす」ためにということでご提言、ご提案を申し上げたいと思います。

私は今、東洋大学理工学部建築学科で講師を務めさせていただいております、その関係で公共施設に関わるプロジェクト、あるいはまちづくりに関わるプロジェクト、それから東京に関わる提言等で提言を続けております。

この「朽ちるインフラ問題」といいますのは、東京だけに限らず、日本全国に共通した問題でございますが、この記憶に新しい中央高速道路の笹子トンネル天井板崩落事故であるとか、あるいは浜松市の第一弁天橋ワイヤー破断事故であるとか、あるいは2013年ですけれども、東京都におかれましては、港区の区道が崩落するというような形で、今全国で一斉に起こりつつある問題でございます。

この問題に関しましては、根本祐二さんという方が「朽ちるインフラ問題」と名付けて、財政的に全ての公共施設・インフラを維持不可能になるという財政状況の中で、アメリカでは1930年代に集中投資されたので、1980年代に一斉に老朽化し、橋が落ちる等の深刻な事態が起こった。それに対して、1960年代以降に集中投資された日本においては、これ

から 2010 年代、20 年代以降に大きな問題が起こるであろうということを予告されていません。

この問題について、私どもでは日本都市計画家協会というところで、「オリンピック・レガシー研究会」という研究会が都市計画系の専門家 17 名で構成されておりまして、座長の養原敬さん以下にこのような専門家が集まりまして、『未来のレガシーにするための 7 つの提言』ということをもとめさせていただいております。ここでは、湾岸、緑地、水辺・川辺、住環境、交通・モビリティ、施設・コミュニティ、地方創生というようなテーマで議論を続けてまいりました。

ここでは、私は、施設、インフラについて提言をまとめさせていただいておりまして、この中で、「公共施設マネジメントの東京モデルをつくる」。中長期的な公共施設の再配置であるとか再編計画、そして、モデル的な再編事業を行うべきであるという提言。これに関しましては、東京都の長期ビジョンの中で、「政策指針 22、23、24」が関連するところでございますが、ということと、それから日本型ゴールデンプラン、これはドイツのプランでございますけれども、総合的な地域のスポーツクラブ・システムをつくり出す「日本型のゴールデンプラン」というものを、これらをあわせて施設論として動かしていったらどうかということをご提言させていただいております。

これを具体的に落としますと、東京都の場合で言いますと、急激な社会変動と、それにあわせた集中投資が起こった年代にずれがございます。これを近郊外、郊外、臨海部に分けてご説明いたしますと、例えば郊外の 30 キロ～40 キロ圏、例として国立市などにおきましては、今後、急激な人口減少及び高齢化が進むということで再配置計画がマネジメント方針として出されております。

中野区などでは、小中学校の再編計画として既に大きな動きがでておりますが、これを施設単体に落としてみますと、このように具体的な施設計画とともに、余剰となった一部の小学校が地域スポーツクラブに転用されるなどの試みがなされております。これは私どもでご提案をさせていただいているものですが、これにさらに総合型スポーツクラブという施策を重ね合わせますと、このような施設の再編にあわせて緑地や地域のためのスポーツの場所、あるいはフィットネスの場所を体系的に確保することもできるであろうということをご提案させていただいております。

今後、オリンピック・パラリンピックの開催によって急激な社会変動が予想されるのは、江東区、中央区、港区といった臨海部でありますけれども、こういったところの施設再編

をどのように行っていくのか。このようなことに関して提言が必要ではないかということ  
で提言させていただいておりますのは、「生活圏からみた政策空間の再統合」、公共施設マ  
ネジメントというのは単なる財政論ではございませんので、これを施設論とあわせて解く  
ことによって、都市空間全体を学校とスポーツクラブを核としたまちづくり空間として再  
編する機会であると捉えてはいかがかということをご提言しております。特に臨海部にお  
いては、「東京都が積極的に区市町村の間に立って協調に向けた広域調整をリードするべき  
である」ということをご提案しております。

こういったことをより明確に政治的なメッセージとして出すということについて、少し  
突っ込んでご提案をしたいと思えます。これは財産破綻をしてしまったデトロイトでござ  
いますが、今日、都市経営のかじ取りを一步誤りますとこのようになってしまう。他方で  
ニューヨークのように、そこから再生したまちもあると。

マイケル・ブルームバーグ・ニューヨーク市長は、「イーストリバー」を戦略軸として据  
え、そしてシンボリックなプロジェクトを設定し、それだけではなくて、12年間の在任期間  
中に都市計画用途地域の40%を書き換えるなど、合意形成を伴う構造改革を積極的に進め  
てまいりました。

これを東京に置き換えていきますと、政策合意形成の成否というものが都市経営を左右  
する。特に先ほど申し上げましたような施設の再配置であるとか、インフラ老朽化対策と  
いった利害が対立するような事柄に対して、ブルームバーグ市長は建築の都市政策を伝え  
る力、そして合意を調達する力に注目し、特に五輪招致活動が人々の都市計画のイメージ  
を変えたということ、このアレックス・ガーヴィンさんの証言によって私どもは得てお  
ります。

これを私のふだんの活動に照らして、参考までにお伝えいたしますと、学校再配置の議  
論であるとか、施設整備の予算額や見積額を提示して、何を削るかを一緒に考えるような  
ことを試みとして行うことによって、施設整備のプロセスを公開して市民の参加意識を高  
める機会にする「鶴ヶ島プロジェクト」ですとか、あるいは建築の演劇性というものを利  
用して意思決定の場を演出する「あいちプロジェクト」などがあります。

これは、あいちトリエンナーレという国際芸術祭で行った実験ですけれども、ウォーク  
スルーアンケートで集めた投票をもとに毎日設計案を更新するという実験を行いました。  
ここでは2か月の間に4,612票を集めまして、それをもとに建築の案を毎日更新していく  
という試み。

あるいは効果を明示して、開発にも前向きな合意形成を行う「大宮東口プロジェクト」。開発をストップするとか、中止するというような合意形成は比較的容易であるのに対して、開発を前向きに検討する。より複雑な合意形成に対して、投資額とか、費用対効果を含めて開発ボリュームのオプションを提示して討議するというような機会をさいたま市で行いました。

あるいは庁舎の中で分節されがちな政策ビジョンを愛知県岡崎市というところでは、シンボリックな都市空間である河川空間を軸に諸政策空間を再統合して、市民の皆様とビジョンを共有する「おとがわプロジェクト」という試みをしております。

以上のような試みを通じて、都市のメッセージを明確にする。なぜその開発に投資するのかということ宣言することによって合意を形成し、対外的にアピールするようなことを、いかに可能かということを考えていきたいと思っております。

デーヴィット・キャメロン・イギリス首相はオリンピックパークの開発に際して、「ショーディッチの創造性とオリンピックパークの可能性を統合し、イギリス版シリコンバレーをつくる」と言っていたわけですが、東京のオリンピック・パラリンピックは一体何を発信するのか。

具体的な絵をお示ししますと、これは新宿から湾岸への軸線でございますが、このような視線の転換をもとに「海とダイレクトに関わることができる都市像」ですとか、「歩行者空間に転用されたインフラのイメージ」ですとか、こういったイメージを共有するようなことができないか。

これは私が以前書いたものですが、今、日本列島が抱えている問題というものをつなぐ線でございます。これに対する回答というのは一体どこにあるかということを検討していきますと、実は、その線をそのまま延長すればよい。これを私は「希望の軸」と呼んでいるんですが、建築的な考え方や合意形成の力というのは、このように課題を可視化して方向性を明示するような力がございまして、このような力を通じて政策合意形成、あるいは社会の課題に対する解決策というものを提案するようなあり方、それをご提案したいと思っております。というわけで、縮小時代の意思決定のために建築の持つ社会的な力の戦略的な活用、特に大学・専門家コミュニティとの協働ということをご提案申し上げて、私からの発表とさせていただきたいと思っております。

ご清聴ありがとうございました。

【前田副知事】 ありがとうございました。

それでは、続きまして、同じくまちづくりの分野でお越しいただきました馬場正尊様より、ご説明をお願いします。よろしくをお願いします。

**【馬場様】** こんにちは。同じく、建築都市計画分野の馬場です。僕は、RePUBLIC TOKYOというムーブメントというか、プラットフォーム、これを提案したいというふうに思います。共和国という意味ではなくて、パブリックを再生する、パブリックスペースを再生するという意味です。

そのまま方法としてリノベーションということが考えられないか。これは古い建物や古い空間を新しいアイデアで再生するということをリノベーションと言っています。僕、これをずっとやってきました。今まで民間でそのノウハウを蓄積したことを、今こそ公共空間に導入したいと、そのタイミングなのではないか。

東京R不動産という、東京中にあるちょっとくたびれた物件を再生して、新しい人にマッチングするサイトを12年間続けてきて、リノベーションブームの1つの手伝いになったと思うんですけども、こういう一見使われていない空間も、新しいアイデアとデザインでぐっと変わってくる。最初にそのアイデアを見ていただきたいんですが、東京湾岸の捨て去られたというか、使われなくなった倉庫です。こんなふうな、すごいいい立地です、湾岸の。だけど、がらんと空いています。東京の湾岸はまだすごく使われていないですね。

これがどうなったかという、これはビフォー・アフターですが、新しい靴屋さんのショールーム兼オフィスとして再生しています。こんなふう楽しい空間として湾岸が使われ始めていて、東京の湾岸を開放するようなアイデアであるとか、あとこれは夕刊フジが印刷されていた工場です。これ廃墟として残っていました。これは輪転機置き場だったところなんですけど、増築も何もできない。これが何に変わったかという、TABLOIDという名前の複合商業施設に変わりました。輪転機置き場だったところがイベントスペースで、オープニングがレディー・ガガのシークレットライブだったりして、湾岸の盛り上がるきっかけとかになっています。オフィスであったり、カフェであったり。屋上はウッドデッキをひいて東京の庭にしています。

あと団地ですね。東京都にもたくさん公共住宅が残っていると思うんですが、4階、5階なんかは結構使われていなくて高齢化が進んでいます。こんなふうに荒れ果てているところもたくさんあって、どちらかというと悲しいイメージに公共住宅はなっているかと思うんですが、これを再生しています。同じアングルです。新しいデザインによって新しいジェネレーション。それからもっと言うと、福祉の立場から見直した再生もあるかと思



うんですけれども、デザインの力によって見事に再生していきます。もちろん家賃収入も増えていくので眠った資産の再活用。こういうことをやりながら、僕は民間ベースで眠った資産の再活用をずっと続けてきたわけですけれども、土間プランとか。あと、団地という概念自体を、公共住宅という概念自体を格好良くリブランディングしていくことによって、そこに住むことが格好良くて幸せであるというようなイメージをつくっていったりとかですね。

これを今こそパブリックスペースに導入できないかというのが僕のメッセージです。1年半前に『RePUBLIC』という本を書きました。公共空間のリノベーション。今年、『PUBLIC DESIGN』、新しい公共空間の作り方についての本を書きました。今持ってきているので置いていこうと思いますけれども、ひたすらパブリックスペースの新しい提案をする本です。この7つのパブリックスペースの新しい可能性について提案しています。

今日はその中からいくつか紹介したいと思います。例えば公園です。東京都の中に一体いくつあるのでしょうか、使われていない、つまらない児童公園、近隣公園が。例えばそこに小さなカフェが運営されているとする。そうすると、そのカフェのお姉さんが子供たちを見守り、近くのお父さんたちはそこでコーヒーを飲み、子供たちを見守り、そして、今まで行政がずっと拠出していた公園の維持管理費を逆に家賃という形で取ることができる。カフェのお姉さんも、行政も、それから近隣の僕らもハッピーという構図なんです。今の枠組みではこれはできません。なので、東京都の条例などによって、近隣公園のリパブリックを進めるみたいな施策が進められないかと。夜は、例えば「ニュー・シネマ・パラダイス」みたいに映画を見ながら、みんなでビールを飲むみたいな近隣公園があってもいいじゃないですか。そういう風景を僕は見てみたい。

その萌芽がちょっとあります。例えば、これ公開空地です。日本橋コレド。日本橋コレドの公開空地が使われていないので、何とかならないかと相談を三井不動産さんから受けて、それをちょっとしたコミュニケーションスペース、無線LANをばんと引いて、そうするだけでお弁当を食べたり、ミーティングをする場所になりました。大した投資ではありません。これは民間が私有しているパブリックスペースだったわけですが、これをパブリック、行政が持っている空間に拡張してもいいのではないかと思ったりしています。

ニューヨークのブライアントパークなんかは、その公園自体に市民がコミットとして民間活力が導入されることによって、ニューヨークの象徴的な風景の1つになっています。東京でも行われていいのではないかと、このオリンピックを機会に。

それから、逆もあります。民間の土地をパブリックに開放する。これは大阪です。道頓堀にあって使われていなかった空き地を松竹芸能と一緒に劇場と広場に開放しました。屋台街、今、道頓堀の中でもにぎわった場所になっています。これはパブリックに私有地を開放したからだというふうに思っています。その中間領域にすごく可能性があるのではないかと。

水辺もそうです。京都にはありますよね、川床が。条例によってクリアしているわけですが、東京都の水辺は果たして開放されているのでしょうか。気持ちのいい水辺が、全部ビルは水辺に背を向けて建っています。あれをひっくり返した途端に、東京は水の都として世界から見られるようになるのではないのでしょうか。シドニーなんかが魅力的なのはそのためなのでは。これは条例で実際にできているわけなので、東京都でもと。

僕、この写真大好きです。民間の土地と、民間のハードと公共のハード、護岸が橋1本というか、すのこ一発でつながっているわけです。これ大阪なんですよ、残念ながら。東京でもやってみたいと。こういうアイデアをつくっていくことで新しい水辺の使い方を考えたいとか、図書館ですね。図書館も、例えば港区もそうですが、図書館の横に公園がある。その間に壁があるんですよ。縦割りの象徴だなと思うんですが、図書館と公園の間の壁をぶっ壊してつなぐことによって、本を公園に持ち出して読める図書館ができるかもしれないとか、ちょっとしたことでそれができる。大した投資ではないんです。システムとルール、その緩和です。

武雄図書館です。これは民間が図書館の運営に関わったことによって、賛否両論ありますが、僕は新しい1つの可能性を開いたと思います。

団地もそうです。公共住宅もたくさんありますが、例えばオリンピックに向けて、その一部を宿泊施設に開放する。用途変更する。今、なかなかこれ大変なんですけれども、こういうチャレンジを今から宿泊が足りない東京都が始めてもいいのではないかというふうに思ったりしています。

今、住居だけのところを商業、それからワークスペースと混在した団地にしてもいいのではないかと。そこで、このようなことを一気にムーブメントとして盛り上げていきたいというのがRePUBLIC TOKYOというムーブメントであり、プラットフォーム。

仕組みとしてはこうです。クリエイターや、僕らみたいなデザイナーとというのはアイデアを持っています。提案力もあります。ビジュアルも描きます。東京都は場所を持っています。土地を持っています。資産を持っています。そこに民間企業の活力、人材・資本

を導入して、それをマッチングするプラットフォームが要るのではないかと。そのプラットフォーム自体をRePUBLIC TOKYOというふうの名づけます。例えば、それはウェブサイトでもいいかもしれません。イベントでもいいかもしれません。そのようにして、3者の資産を持ち寄ることによって新しい東京の風景をつくっていきたい。それでオリンピックがあるころには、世界にこのようなパブリックの空間の使い方があるんだということを提示したい、そんなことを考えています。

ちょっと参考までにですが、3か月前に公共R不動産といって日本中の余った公共空間を、面白い公共空間をばっと出して、その使い方なんかを提案するというようなことをやっています。もしも東京都で余った公共資産がありましたら、ぜひお問い合わせいただければ掲載しますので、よろしくお願いします。

ありがとうございます。

【前田副知事】      ありがとうございます。

続きまして、医療福祉の分野でお越しいただきました久野譜也様より、ご説明をお願いいたします。よろしくお願いいたします。

【久野様】      筑波大の久野でございます。よろしくお願いいたします。私の専門はもともとスポーツ医学で、いわゆる一次予防、なるべく寝たきりにしないということをこれまで行ってきました。それが、実はまちづくりまで行わないと健康長寿は達成できないということが科学的にわかりましたので、本日はこのような観点でお話をさせていただこうと思います。

ちょっと1枚目のスライドは堅いので、後で読んでいただければいいんですが、今、日本の医療費のほぼ50%ぐらいが、ご存じのように生活習慣病関連であると。生活習慣病ということは、ある程度抑制することができる。ただし、ここまで便利な社会を我々は幸せだと思いつくってきたのですが、その副作用に今困っているわけです。そういう現状におきまして、これだけ便利な社会、先ほど知事から歩道橋の話もありましたが、なかなか健康になりやすい社会環境に変えることはできない。そして、それを変えていくためには、我々の価値観も変えていく必要があります。ただ、これは簡単ではないので、価値観が変わらなくても健康になれるような、そういうまちの形態というものはないのだろうかと考えだしています。そのことを堅い言葉で言うと、もう少し自助を強めていく仕掛けというのが、多分システムとしても必要じゃないかというお話も本日させていただこうと思います。

これは、そのためのベースのデータになりますが、WHOが2009年に初めて世界中の論文から、ちょっと俗な言い方を言いますと、早く死ぬるベスト20というものを発表しました。このスライドには、そのうちのベスト5だけ載せていますが、1位、高血圧、2位、たばこ、3位、脂質異常症、糖尿病も含まれていますが、何と4位に運動不足が入っています。今のエビデンスでは、運動不足を解消すると、2位のたばこの害以外は、全て薬、すなわち効果があるということが示されています。つまり、あまりにもオートメーカースた自動車に依存したこの生活を変えていく仕掛け、ただし、我々江戸時代に戻るわけにはいけないので、どうそれを自律的にうまくコントロールしていくのか、そのような観点が多分重要なんだろうと考えています。

それから、これからの、先ほどの知事のお話を引用させていただくと、団塊の世代の方があと10年後に全員が75歳以上に到達される。ここでの寝たきり問題で重要なのは、間違いなく認知症対策です。ここを徹底的にやっておかないと、本当に大変な時代が来ると思っています。こういう中で、今エビデンスとしても、これはアルツハイマー病のリスクを表しているのですが、色々な要因がある中で、やはり運動不足が一番認知症になるリスクが高いということがわかってきています。そうしますと、食事や、心の問題も、もちろん重要ですが、ちょうど東京オリンピックを目指している中で、運動の重要性を伝えるのには非常にいい機会のはずです。そして、エビデンスからも運動不足のリスクがわかっていますので、これが1つの日本国民を健康長寿にするというレガシーをつくっていくという考え方は、非常に重要であろうと考えております。

これは我々のエビデンスなんですけど、上側は、2,000人ぐらいの左側のデータは、きちんと運動プログラムをすると、体力年齢という我々が作った指標が、わずか3か月で約5歳若返るというきれいな結果が出ています。右側は新潟県見附市で10年前にやったスタディーですが、青いほうの下側がプログラムをやった群で、ピンクが対象となるコントロール群、つまり、やっていない人たちです。スタート時は同じ医療費なのですが、1年目ぐらいから差が出てきて、3年目には、プログラムをやるかやらないかで1人当たり10万円程度医療費の抑制効果があるというエビデンスが出ております。

実際に、見附市のみではなく、10自治体以上で同じように医療費の抑制効果というものが出ています。ですので、うまくやれば健康にもなれますし、実は社会保障の抑制効果もあるということがある程度わかってきたのではないかと考えております。ただ、問題なのは参加人数で、その下を見ていただきますと、見附市の人口は4万4,000人ですので、国保

の会計をマスのレベルで良くしようということになると、このプログラムに2,000人参加すれば、国保会計がかなりドラチックに良くなると考えました。市長と5年間で2,000人が参加する仕組みをつくろうと平成16年から始め、3年目に1,000人を達成しましたが、そこから頭打ちになってしまいました。これは隣の三条市、千葉県流山市、福島県の伊達市でも同様で、これは何故であろうかという課題が浮き彫りになりました。

そこで、総務省から研究費をいただき、5,000人規模の住民のランダム調査をさせていただきました。まず、上側を見ていただくと、必要な運動量に満たない未実施者が約7割、できている人が3割という構成になっております。私は、最近これを7:3の法則と勝手に名づけておりますが、厚労省の国民栄養調査のデータを見ても、必要な運動量を満たしている国民は約3割で、「健康日本21」という運動施策を2000年から10年間実施しましたが、それでも運動量は変わっていません。

つまり、7割の運動に対する無関心層への対策が必要であると考えております。しかし、これまで自治体等で行われてきた健康政策に参加してきたのは3割の関心層だけであり、7割にはほとんど情報、政策が届いていませんでした。そうなりますと医療費が変わらないのは、ある面、当たり前の結果だったのではないかという仮説が生まれてきます。

さらに、ショックだったのは、この7割のうち「今後運動をやる意思がない」と答えた方が何と7割もいたことです。7割の7割ですから、約半数が今後もやる意思がないと答えたことになります。ここでもうひとつ重要なのは、公衆衛生の我々の分野では、運動や食事が重要だとわかっているけど、なかなか生活を変えられない。わかっているけど変えられないという前提で、ずっと議論してきたことです。しかしながら、マーケティングの先生と一緒にデータをとると、この無関心層は、統計的に情報収集をしていない集団だということがわかりました。今、できていないけれど、今後やる意思がある、あるいは今やっているという方々は、情報収集をしている集団です。行動を変えるというのは、情報を認知して、その価値を認識しなければなりません。ということは、情報収集自体をしていなければ、変わるはずがないという仮説も生まれてまいります。

そして、これまで自治体や、あるいは国が色々な啓蒙活動を行い、イベントや情報を投げても、それを収集しているのは関心層で、課題のある無関心層に届いていませんでした。情報を届ける仕組み、あるいはコミュニティ単位でインフルエンサーをどうつくっていくか等、これまでと違う戦略をとらない限り、また同じ結果が出ることは、ある程度明白だろうという仮説を持っています。

そこで、今我々はコミュニティ単位でどう情報を伝達するか、そういったコミュニティ再生を行うかという事と、もう一つ、少し大胆なのですが、無関心のまま健康にしていまえないだろうかという、2つの仮説を今考えておりますので、そこをお話しさせていただきます。

1つは、国の支援を受けて、1万人規模の6市で大規模な社会実験でインセンティブ、エンジン作戦で動かさないかということで、ここにありますような、努力と成果に応じてポイントを付与します。ただし、これは自己申告ではなく、ICTを活用して、歩数計や体組成計のデータを簡単に飛ばせますので、それに応じてポイントがつく仕組みを構築しております。年間2万4,000円分のポイント付与があり、これが共通ポイント、Pontaや地域商品券に換えられるという形で行ったところ、良い結果が出ました。時間の関係で見たいだけ所のみとなりますが、この分類で、運動に無関心な層や不十分な層が大体75%を占め、十分な層が25%、1万人に対して約7,500人は不十分な無関心な層が出てきたことがわかります。そういう面で一定のインセンティブというものは成功する可能性があることが考えられます。ただし、この原資をどうやって回すかというビジネスモデルが、もちろん非常に重要になります。

時間がまいりましたので次に進ませていただきます。無関心のまま健康にするという方策ですが、今回、東京は非常にいい例ですので、ピンクだけを見てください。日常の移動手段が自動車だという方の割合が東京は35、大阪は45、愛知は75です。右側は糖尿病の患者数です。東京が一番少なく、愛知が一番多いことがわかります。私は、名古屋生まれなのですが、東京と愛知でヘルスリテラシーに差はありません。ということは、東京が健康になりやすい都市環境であったということになります。なぜかというと、車を使わなくても移動ができる。公共交通が非常に整備されている。基本的には歩いて暮らせるまちづくりというコンセプトが必要だと思っているんですが、そのためには公共交通政策も非常に重要で、従来の狭義の健康政策だけでは健康長寿の社会というものはつくれないと思います。

一方で、こちらは少し悪い例で、市長の了解をいただいて出している新潟県三条市です。中心市街地で平日の午前11時、誰も歩いておらず、シャッター街となっております。こちらでもこれまで地域経済だけの問題で語られてきたのですが、実はこういう光景を見ると、この町は糖尿病が多くて医療費が困っているだろうと推測して調べていくと、大体当たります。こういった都市の状態、地域経済、にぎわいがあるまちをどうつくるかということも健康なまちづくりに非常に重要なのだということをお伝えしておきます。

最後に、町の1つの例として、ドイツのフライブルクをお示ししたいと思います。環境都市として非常に有名な町ですが、70年代には、これだけ車があふれていたのが、今はこういうにぎわいのあるまちになっています。L R Tを入れて人があふれている状況です。当初、商店街の皆さんはとても反対されたいのですが、結果的に車を止めて活気ある歩くまち、ウォーカーブル・シティをつくったことで、売り上げが3倍以上伸びたというデータがあります。

一昨年、2回目の訪問をしたところ、フライブルクの医療費がドイツの中では下から数えて2番目に低いということがわかってきたと伺いました。我々研究者はその因果関係を調べなければいけません、こういう都市構造が健康に影響していく可能性があると考えます。今後、人口減少していく中で、広がってしまったまちを集約化し、公共交通と歩くという観点をどう組み合わせるかということが非常に重要だと思っています。

最後に、今、多摩市のデータを見ているんですが、多摩市は、健康寿命が東京都、全国的に見てもとても良い状態にあります。多摩市民は駅までの坂の上り下りや行き帰りの、電車利用、歩くといったことを、結果的にできていたのではないかという可能性が出てまいりました。

以上でございます。ご清聴、どうもありがとうございました。

**【前田副知事】**      ありがとうございました。

続きまして、芸術文化の分野でお越しいただきました小堀優子様より、ご説明をお願いいたします。よろしく願いいたします。

**【小堀様】**      初めまして。まず、2040年都民皆茶を目指します。東京に茶道の心があふれる都市になってほしいと願っています。私は、遠州流茶道の小堀優子と申します。

父が遠州茶道宗家十三世の家元です。私の先祖は、江戸時代に徳川将軍家の茶道指南役を務め、江戸のランドデザインを手がけた小堀遠州です。430年の時を経て、この私が東京のランドデザインにかかわれることに、とても深いご縁を感じています。

「お茶を一服、さしあげます」。この言葉は、お客様にお抹茶を差し上げる時の言葉です。「おはよう」とか、「こんにちは」とか、「こんばんは」、「ありがとう」、そういった言葉と同じように2040年には東京が「お茶を一服、さしあげます」と言えるような世の中になってほしいと私は思っています。

そのための提案として、あくまで例ですが、6月6日「都民皆茶の日」に制定します。都民みんなが茶道をする日です。都民の日とは区別して、何か文化的なものを始めようと

ということです。6月6日都内全域で、同じとき、同じ空間を感じながらお茶会。東京都全体がお茶室になる。お茶室と言われましても、お茶室がなかったり、お茶室をつくるのは面倒だよという声があるかもしれません。しかし、お茶会、もともとは人がいればできます。なので、どこでもイベント的に仮設でできますし、現代の建築に応用したビルの中にお茶室をつくることもできます。つまり、この都庁にもお茶室をつくることができます。建築としてのお茶室。これは私の家ですけれども、都内でも普通にお庭がついてお茶室がある。そんな風景のある東京はいかがでしょうか。

その中でも、なぜ茶道なのかというところです。日本文化はたくさんありますが、茶道は、その中でも日本の伝統文化を全て含んでいます。着物でしたり、華道、お花、陶芸、書、お歌、それぞれを含んでいるのが茶道です。そして、そこには私たち日本人が失いかけている日本の心が詰まっています。その日本の心とは五感です。五感というのは、人間なら誰しもが持っている感じ取ることですけれども、私たち日本人には独特の五感があります。

まず、「視覚」、物を見るときに姿形を見るだけではなくて、そのものが誰の手を渡ってきたのか、どのようにしてここに来たのか、歴史的背景を見るということになります。

「聴覚」、サウンド、音を聴くのみならず、例えばお茶室ですと、釜の煮え音、壺のすれる音、ふだん聞こえない音、さらには静かというものも音として捉えています。

「味覚」、お抹茶やお菓子、あとは会席。おいしい会席などをいただくとき、素材本来のものとしっかりと向き合うことで、つくってくれた人への感謝の気持ちをも味覚と捉え、それが本来の味の奥深さだと私は認識しています。

「嗅覚」、香りを嗅ぐこと。

そして「触覚」、ただ触るだけではなくて、その触り心地に価値判断を見出し、重さへの感性を磨いています。

私たち日本人は、昔からお茶碗を持って食事をいただく習慣があります。海外ではお皿を置いて、フォークとナイフで食事をいただきます。ですので、私たち日本人というものは物を持つときに、これぐらいの見た目で、これぐらいの素材で、こういうような形をしているなら、大体これぐらいの重さだろうと経験則で想像してから物を取っています。それゆえ、それより重かったり、軽かったりすると、意外に重いなとか、意外に軽いなとか、あるいはこういう形でこういう格好で、これぐらいの重さだろうと思っているのに、意外に軽かったりすると、それは私たちの感覚に合わないということで、それを使わないとい



うような判断基準にもなっています。

こういった五感を小さいときから磨くと、大人になったときに初めてお会いした方などに対しても、こういう人にはこういうような対応をしようとか、こういう雰囲気の方にはこのようなふうに接していけばいいなというような、日本人独自のあうんの呼吸が育成されているのです。

この五感を東京都全体で共有すると、例えば自然光だけで生活してみる。ふだん聞こえない音を意識して聞いてみる。あとは見た目から、着物を着てみましょう。着物を着ると、客ぶりを楽しむことができます。最近ではお客様は神様だというふうに言われていますけれども、本来、お客様というものはおもてなしする人を楽しませる、喜ばせる、それが本当のお客様の醍醐味です。一座建立を楽しもう。茶道という日本の五感というものを共有して、ふだん挨拶をしない人にも声を出して挨拶をしてみましょう。それが私たち日本人、人間の基本です。

これを東京全体に仕込む。お茶室といえども建築だけのお茶室ではありません。あらゆるところにお茶室を仕込みます。例えば、その日も都知事がお茶会に参加しているのをライブビューイングで流すのもいいと思います。そのときに来年のお題なんかを都知事に出していただいて、翌年にお茶会をつなげるというものもすてきな東京になるかと思います。

文化には、茶道のみならず、たくさんの伝統文化がございます。その中で共通しているものは「型」というものです。茶道のお点前や食事のマナー、先ほど言ったお題も型です。また、スポーツにも素振りやルールといった型がございます。

実は、私はラクロスというスポーツをしていて、2013年日本代表としてカナダのワールドカップにも出場いたしました。世界の舞台で戦って感じたことは、世界から見る私は、日本人でもなく、ただのちっぽけな一人の人間ということでした。というのも、私たちは日本人という認識をされることがなく、その大会中に他国の選手にお茶を一服差し上げる機会をつくり、お茶を一服差し上げました。そのときに初めてジャパニーズというふうに言われてリスペクトされた経験があります。茶道というのは、世界的に見ても、日本のものという認識がありますし、これは世界のみんが知っていることです。

このような経験から、私はスポーツの世界において、将来、日本代表を目指す選手、子供たちに日本文化を体験していただき、日本文化を背負い、本当の意味で自信を持って世界と戦ってほしいという活動をしております。子供たちに英語を教えるのはもちろん必要なことなんですけれども、本来ならば、自国の文化をしっかり勉強し、義務教育にも取り

入れていただきたいと思っています。言葉が通じなくても、たった一服のお茶で日本の五感を海外の方にも一瞬で共有していただくことができます。そんなすごい力を持っているのがお抹茶です。

2040年、東京は一体どれぐらいの比率で海外の方が住んでいるのでしょうか。3割、4割、もしくは半分、それ以上になっているかもしれません。グローバル化という言葉もなくなっているかと思います。ですので、6月6日、「日本の五感」を共有していただきたい。それが私の言う「都民皆茶の日」です。

また、色々な技術が発達して、実際、物を見たり、触ったり、あとは人と人とがコミュニケーションする機会が大変減っています。そういうことで人間の感覚というのが少しずつ鈍りつつあります。だからこそ、私たちがふだん見たり、触ったり、食べたり、味わったり、そういうようなことを実際にやっていただきたい。日本の貴重な財産を残さなくてはなりません。春になれば桜が舞い、夏になると風鈴の音が聞こえ、秋になると落ち葉を踏む音が聞こえ、冬になると火をおこし、暖をとる。そんなリーダーが東京になってほしいと思っています。私は、2040年都民皆茶を目指します。

最後に、2040年東京に思いを込めて、「茶の道に託す未来は誇らしき、心もまちも豊かなる東京」。

ご清聴、ありがとうございました。

**【前田副知事】** ありがとうございました。

引き続きまして、ビジネスの分野でお越しいただきました林千晶様より、ご説明をお願いします。よろしく願いいたします。

**【林様】** それでは、私のほうはビジネスという視点から、「個が主役になる都市・東京」というテーマで、個人と国、起業の可能性についてお話をさせていただきたいと思います。

私は、2000年にロフトワークという会社をつくりました。これはデザインのとテクノロジーを融合して、どうやって新しい価値を生み出すことができるかというクリエイティブエージェンシーです。現在、約100人、年間500件のプロジェクトを実行しております。

3年前に始めたFabCafeというカフェは、東京発、世界で初めてのデジタルものづくりができるカフェを始めました。現在、世界5拠点に広がり、新しい物流であったり、商品開発の拠点に育っています。それと同時に、アメリカにある研究機関であるMITメディアラボの日本の活動の統括もしており、ここを通じて日本の企業がどうやって新しいサービス、新しい事業を生み出していけばいいのかということに日々取り組んでおります。

このような説明をすると、「3つもやっていて、林さん、どうやってバランスをとっているんですか」という質問を受けるんですが、実はこのばらばらのような3つの活動の中心は、実は同じことにチャレンジしています。これが何かというと、オープンイノベーションと言われる、いかに個人の力を組み込んで、企業の活動、あるいは行政の活動を活性化していくか。これが世界で注目を浴びている1つの大きな流れになっています。

私たちがやった、たくさん紹介したいことはあるんですが、時間もないので2つだけ、実際にやったことは、例えば、現在新潟で「大地の芸術祭」が開催されていますが、人は来ても地元の企業が潤わない。どうしたらいいかということに対して、地元の企業と1万人のクリエイターをオンラインで結びつけ、名産品をデザインするというプロジェクトを7年間実施してきました。約100点のアイテムが生まれ変わり、売り上げは平均3倍、20倍になって生産が追いつかないといったような事業も生まれてきています。

また、FabCafeと言われるものづくりのカフェも、今まで高価で企業じゃないと買えないような高額な工作機械を個人に使ってもらおうという場所をつくることによって、延べ1万の作品が生まれ、これが今、バルセロナ、台湾といった世界に広がる新しいものづくりのビジネスのネットワークとして広がっています。

こういった活動を通じて、2040年何を期待するか。これは、実は先ほど馬場さんの説明と驚くほど似ていてびっくりしてしまっただんですが、オープンアーキテクチャー、オープンな仕組みを東京都の中に導入するということを提案したい。オープンの価値は何なのか。これは個人にとってみると、誰もが主役になって能動的に参加できる。今まで個人力は色々活用してきたと思います。でも、それが許可制であったり、事前登録制といったことで、本当の意味で個人を主役にできていない。そうではなく、どうしたら本当に個人が主役になるオープンな仕組みができるのか。それが実現すると、行政とか企業にとってみると、自社だけではとても実現することができない多様な、そしてスケールのあるサービスであったり、ビジネスといったものが生まれてくる。これがオープンアーキテクチャーの魅力です。

実際に世界で注目を浴びている事業は、非常に驚くほど上手に個人の才能を生かしています。例えば新しいタクシーの配車サービス「Uber」、これは利用者にとってみると、安い、早い、便利といったことがあります。この事業がなぜ可能になったのかというと、タクシー会社に雇われた運転手ではなく、自分の車を使い、自分が働きたいときに乗せるお客さんを選ぶ。つまり、自分が主体のタクシーの会社を1人ずつが運営するといったことに

よって車の質も上がる、サービスも上がる。自分が評価されるから、何の教育もマニュアルがなくても、アメリカ中のタクシーのサービスの質が日本よりもずっと高くなってしまったのは、個人が主役になるタクシーのサービスが実現するプラットフォームを提供できているからです。

同じように、airbnb、今世界で最も大きな部屋数を持っている拠点になっていますが、これも利用者側の視点ではなく、ホスト側の視点で見ると、全く違うものが出てきて、今まで、有名な話ですが、子供がいて旅行に行けないお母さんがホストになる。「なぜですか」と聞いたときに、「私は子供が小さくて世界に行けない。でも、ホストになることで世界中から人が来てくれて、子供に世界を教えることができる。こんな素晴らしいことはない」。これがairbnbの価値の本質であると。つまり、ホストが自分の場所に自信を持ち、それで世界中の人をもてなすという、その可能性を提供しているから、airbnbは現在80万室といったところまでこの数年間で伸びている。そのことにアメリカ政府はいち早く着目しており、2009年からオープンガバメント、その後、デジタルガバメントといったことでインフラづくり、個人との関わり方といったことを政策として実現してきています。

ということで、この図が馬場さんと全く一緒で、位置関係も一緒なんですけど、官民の連携だと私は思っていません。そうではなくて、個が主役です。個が主役で動けるために、どうやって行政と企業はそのための仕組みを提供できるかという戦略に移る時代なのではないかと。これがパブリックの概念が日本の中で生まれ変わる瞬間です。

欧米で話していると、欧米ではパブリックは私たちの場所、でもアジアでパブリックは、特に日本ではパブリックはというと、行政の場所になってしまう。そうではなくて、私たちの場所という形にパブリックが変わった瞬間に、ほんとに魅力的な東京というまちが生まれてくるんじゃないかと。

具体的に3つのアイデアを持っています。1つは、私たちのまちなので、私たちが良くしていきますと。行政に文句を言うものではないと思っています。そのために、まず最初にイニシアティブ、ちゃんとこれは、RePUBLIC TOKYOでも名前は何でもいいんですが、明確に宣言をすることが非常に重要だと思っています。これが何とか何とか実行委員会ということではなく、ムーブメントになるようなイニシアティブであったり、RePUBLIC TOKYOであったり、そういった名前のもと、主に3つ、重要なのは特に2つなんですけど、1つは、データを中心とした基盤づくり、ITの基盤づくりで、どれだけフラットに個人が参加できるIT戦略を立案するか、これが重要になります。

現在、交通データとか気象データといったようなデータ、あるいは行政のデータがある程度はオープンになっているんですが、東京は世界を先んじていきたい。どんなデータを公開していくか。例えば健康に関係があるのは微生物だと言われていています。東京の中の私たちは何万という微生物とともに暮らしているんですが、そのエリアごとに微生物の構成が全く違う。その微生物とどういうふうに生きているのか。発酵の技術も含めて、そういったマッピングをする。あるいはコミュニケーション、この部屋の中でどれだけコミュニケーションが活性化しているかというコミュニケーションの質もデータになるようになっていきます。

大きなデータではなくて、小さなエリアごとのデータをどうやって渡していき、企業であったり、行政の政策に生かしていくか。本当に活発な議論が行われる場所はどこにつくられているのかという生きたデータの戦略をつくる。それとともに、いきなりルールはつくれないので、リーディングプロジェクトをどんどん実行していく。年間に10件といったような数でプロジェクトを実行していくという形でOPEN TOKYO INITIATIVEといったものをまず宣言し、実行していくことはどうでしょうか。

具体的に、どんなプロジェクトができそうか。これは色々なプロジェクトが、健康のプロジェクトも、都市のプロジェクトもあっていいと思うんですが、私は2つ思いついたものを提案したいと思います。メイド・イン・ネイバーフッドという概念で、これはエッツィと言われる趣味でつくったものを流通させるインターネットが現在、約1兆円の年間の取引が生まれるサイトにまで育っています。

大量生産・大量消費といったものから次の世代に移る時代になっている。今はメイド・イン・ジャパンでも、メイド・イン・トーキョーでもない。メイド・イン・上野であったり、メイド・イン・谷中であったり、メイド・イン・都庁であったりといったような、本当に小さな中でどうやってつくるという行為、そしてそれを楽しんで消費するという新しい、つくって楽しむという、ともに生産していくような、そういった文化をつくっていくかといったことが、世界でどんどん事例も出てきています。

それを、政策面もあるんですが、先ほどあった、使われていない公共空間をぜひ実験的な拠点としてつくってみてはいかがでしょうか。その場合、物をつくらせるだけではなくて、物をつくり、お茶を飲み、映画を見て、コーヒーを飲むといったような、そういった文化的なものが一緒にあることによって、ともにつくるといった文化が強化されていくんじゃないかなというふうに思っています。

それから、「東京ぜんぶが、ひとつのホテルです」ということで、これは馬場さんともぜひ実行していきたいと思っているんですが、airbnbは止めることができません。どれだけ国であったり、都市が反対しようとしても、今までYouTubeであったり、グーグルであったり、こういった世界の流れを止めることができたサービスはありません。そのときに、YouTubeができたときにグーグルの角川さんがやったこと。宝物の原石だから、角川のコンテンツを使ったものを全部認める。1個ずつ見ていき、だめなものだけは罰するという方法をとったのと同じように、例えば東京都が世界の都市でいち早くairbnbと戦略都市になる。その分、東京でいかにairbnbがうまく使われるように彼ら側に対してもリクエストを出していく。そのことによって、どういう人たちが生き生きしてくるかという、例えば銭湯を経営している6代のおじいさんであったり、主婦として働いている、生産性に貢献していないと言われているような人たちが東京の豊かな食の文化、あるいはカルチャーを提供し、その人たちが事業の担い手になっていく。この多様なさまざまなおもてなしの心を持っている一人一人がコンシェルジュになったときに、東京というこれだけ魅力的な都市としてのホテルになれるような都市は東京以外にないと思っています。こういったようなプロジェクトはさまざまな規制で今は実現できませんが、プロジェクトという形でぜひ実行していけたらというふうに思っています。

ありがとうございます。

**【前田副知事】** ありがとうございます。

続きまして、ビジネスの分野でお越しいただきました仲條亮子様より、ご説明をお願いいたします。

**【仲條様】** グーグルの仲條亮子と申します。よろしくお願ひいたします。まず、私もグーグルという会社、まだ実は生まれてティーンエイジャー、17歳ぐらいのものです。ですので、もしかしたらここにいる、もしかしなくてもですが、一番若いかもしれないんですが、まだまだこれからも若く、やんちゃでありながらも、しかしながら社会とどうやって接点を持って社会と一緒に伸びていこうかと、そういうことを考えている会社です。

この会社がどういうふうにイノベーションという言葉をいただくようになったか。また逆に言うと、イノベーションを私たちのDNAに必ず入れるようにしているんですが、その組織、どういうふうにしていったか。組織であっても、まちであっても、会社であっても、実は根本は一緒だと思うので、そのあたりを今日はお話をさせていただきたいと思っております。ちなみに、私、伊能忠敬さんの出身の香取市の隣の出身ですので、本当にあ

りがとうございます。私どもの本当にヒーローです。

まず、私どものもともとのビジネスであります検索部分なのですが、検索の結果というものをちょっと調べてみました。これは実は皆さんオープンになっていますので、ネット上でやってみると出てくる結果ではあるんですが、イノベーション、イノベティヴという言葉とどのような都市を掛け合わせて見ているかというものの結果です。見ていただきますと、まず、イノベティヴで、ロンドン、ニューヨーク、パリ、東京、シンガポールとなっています。見ていただくと、グリーンのラインが下のほうにすうっとあるんですが、ないわけじゃないんです。ですが、東京はイノベティヴという言葉とつながってくるということというのが残念ながらまだありません。これからです。

では、そのイノベティヴという言葉とどういうふうに掛け合わせてくるかというところなのですが、私どもが持っておりますグーグルの9つのイノベーションのプリンシパルというものがあります。そのうちの、まず最初に6個のことをご紹介申し上げたいと思っています。

最初から申し上げますと、INNOVATION, NOT INSTANT PERFECTIONと書いてありますが、どうしても日本人なるもの完璧を求めるんですよね。そうではなくて、とにかく始めましょうと。実は今回こちらのお話を伺ったときに、2040年、2050年どうなっているんだ。わかりませんというのが多分本当の心だと思うんですね。私どもグーグルの中でも実は半年後どうなっているのかわからないというのが正直なところです。ですので、どういうふうに変化にいつもついていけるような、また、変化を起こすような人材、組織であるか。また、そういう都市であるかということが重要だと思います。なので、もう一つ私どもよく使う言葉で、Fail Fastということがあるんですね。とにかく失敗をするんだったら早めがいいと。試してみて、やってみて、だめだったら、そこで軌道修正をしたほうがいいということがあります。

実は、私、以前マイケル・ブルームバーグに仕えていたことがございまして、彼に言われたときには、とにかくディシジョンをきなさいと。ディシジョンをしないと前に進まないから。If you don't make a decision、何も始まらない。そこと通じるところがあるかと思えます。

そして、2つ目、不可能と決めつけない。ムーンショットシンキングと書いてありますが、グーグルグラスというものがあつたんですけれども、これも実際話し始めて、実はモックアップまでは90分ぐらいででき上がっているんです。モックアップと言っても、何が

モックアップかという、スキーのゴーグルかけて、カメラつけて、携帯つけて、そんなものです。でも、やってみてどうなんですかということを考えて、またそれを楽しみながらやっていくと。それが私たちが考える、ケネディさんが言ったようなムーンショットな考え方。やり方はわからない。でもやってみないと。そのリーダーの意志というのが非常に重要だと思います。

そして3つ目、ユーザーに対して焦点を絞るということです。すみません、一つ一つ私も用意していたのに。まず、これがイノベーションの初めから完璧を求めないというのをスクラッチで描きながらやっていくというところの絵柄であったり、ムーンショットシンキング、10%の成長だと全く意味がないであろうと。Ten times、10倍のもの、最近だと10乗のものを考えろと言われるぐらいになっています。それはどういうことなのだろうと。つまり、私たちがこれがだめ、あれがだめ、それがだめ、きっとだめだというふうなことを考えるのではなくて、それを全部外してシンクエクスペンシヴで、その後リダクティブにしていくというようなプロセスをとります。

そして、話が戻りますと。FOCUS ON THE USER。これ地図なんですけれども、グーグルではマップの事業なども持っております。先ほど来も色々な地図や、またまちづくりの話というものがございましたが、こちらのほうもどのような使われ方をしてもいいんです。例えばボストンでは、豪雪地帯なんですけれども、その中でどうやったら消火栓を雪に埋もれないようにするかということが、実は非常にコストがかかっていた。それを、実はここに消火栓があるんだよということ載せていくことによって、近所にいる人が、これ僕の、もしくは私の養子にしますと。Adopt hydrantというような動きが出てきて、近くにいる人は時々行っては、それを掘って消火栓がそこにあるようにすると。同じようなことは、実は津波警報器というようなことでやっている都市というものもあります。

ですので、先ほどもお話が出てきましたが、どうやったら都市に存在するデータを市民を巻き込んで色々な解決策につなげていって、またオーナーシップを持っていくことというのにマップなどというのは非常に親和性があるのではないかと考えております。

そして、会社のカルチャーに関することで申し上げますと、イノベーションを生むに当たって、例えば東京という都市もSHARE EVERYTHING YOU CAN、本当に共有できるものというのはオープンにしていこうと。多分、知事のお考えと非常に近いところがあるかと思えます。そのためには本当にハードなタフなクエスチョンというのを随分受けていかなくてはいけないと思うんですが、それに対して、どうやっていくんだということを考えられる



都民、一人一人の責任というのも重要になってくると思います。

そして、データ、これは先ほど来データの話などは出てきていますが、全てにおいて、私どもの会社の場合、いくら上の者がこれが正しいと言ったときに、いやいやいや、これだけのデータがあるんですから、これが正しいですよと言ってチャレンジされたときには、どんなに1年生の人でもその人の意見を採用します。そこは非常にフラットです。

そこから出てくるのが、このIDEAS COME FROM EVERYWHEREですね。例えば一番左側のほうにある海の中でカメさんが泳いでいるのがありますけれども、ストリートビューとか、色々なものがありますが、ある一人のグーグルの人間、グーグラーというんですが、グーグルの人間が海を泳いでいたら、「あれっ、ここにも道があるじゃないか」といったアイデアから出てきたりするのがオーシャンビュー。これさえあれば、きっとファインディング・ニモも家にすぐ着けたんじゃないかというようなものですね。なので、色々なアイデアがあります。それをどういうふうに形づくっていくかといったときに、私どものカルチャーの中で非常に重要視しているのがダイバーシティの部分です。

どうしてもダイバーシティというと、残念ながらと言いかたもおかしいですけども、すぐジェンダーの話になるんですね。ジェンダーではないんです。どういうバックグラウンドで、どういう考えを持って、どういうようなものをつけ加えていってつくっていくのかと。その人たちを集めていくのであるので、それがこの東京がイノベーションを生むためには非常に重要なところだと思います。

先ほど9つのプリンシプルというお話をしましたが、今、紹介したのは実は6個なんですね。残り3つ、ちょっとこちらには用意していないのですが、その中には人材をどういうふうに採用していくか。また、活用していくかということが入っています。財というもののというのは、先ほど来、空間やまち、健康、文化、そして個の力という話が出てきているかと思いますが、全てが財産だと思います。しかしながら、それをどうやって動かしていくかというのは人材なんですよ。本当に皆さんもご存じだと思いますが、そのときに私どもが持っているものが、「夢を追う権利」というものを社員一人一人が持っています。それを使って20%ルールといって、今、私がやっている仕事とは全く別に、20%の時間、何かに使える。そこから生まれたのが例えばGmailだったりします。なので、必ず1つの仕事だけをさせるのではなくて、新しいことを全く違う人とやることによって新しいビジネスにつながるが出てくるかもしれない。それを認めるようなまちになっていくとよいかと思っています。

時間でもありますので、最後に1つだけ、私、8歳と4歳の子供がおります。彼らが多分2040年になると、ここのまちに住むのか。また、どこのまちに住むのか。世界中全ての中で競争になっていくと思います。まちに選ばれるような人間になってほしいと私も子供たちのことを思いますが、逆に、このまちがそういう子たちが集まってくるようなところになっていかなくはいけないと思いますので、この後のディスカッションのときに、ぜひ人材がどういうふうになっていくべきなのか。ぜひ教育の部分というのもすごく私もパッションを持っているところですので、そのあたりなどもディスカッションに入れればと思っております。

また、成功の指標というのも非常に重要だと思うので、どういうふうにKPIをつくっていかれるのか。これも今の時点で確認をして、ビフォー・アフターを確認するというのも重要ではないかと思っております。

ちょっと急ぎ足になりましたけれども、こちらで私の発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

**【前田副知事】** 仲條様、どうもありがとうございました。

続きまして、働き方の分野でお越しいただきました安藤美冬様より、ご説明をお願いいたします。よろしくお願いいたします。

**【安藤様】** 舩添さん、皆さん、こんにちは。ご紹介にあずかりました安藤美冬と申します。このようなかしまった場になかなか来ませんので、大変どきどきしております。ぜひにこにこしながら話を聞いていただけたらうれしいです。

「働き方」のプレゼンテーションの前に、ちょっと私の個人的なストーリーをお話しさせていただきます。私は20代、集英社という出版社に勤めていて、OLをしておりました。5年前に独立をして、今、一介のフリーランスとして働いているんですけども、ちょうど今から10年前、この夏の暑い日に私にある出来事が起きたんです。それは、出版社の社員として非常に忙しく働いていたんですけども、ある日突然、電車に乗ると汗をかいて止まらない。朝起きるのがすごくおっくうだったりとか、仕事に集中できない。耳元で「安藤」って大きな声で叫ばれても、なかなか気づかない。そういったことが起きまして、何だろうと思って、先輩に勧められて行った心療内科のところで診断されたのが抑うつでした。うつという病気になる一歩手前の状態だったんですけども、私はその日から半年間会社を休職することになりまして、まだそのころ26歳だったので、ものすごくショックだったんです。

もう家でずっと猫のように眠っている間に考えたのは、仕事ってものすごい人間の尊厳に関わることなんだなと思ったんですね。働きたくても働けない。人に喜んでもらえない。行く居場所がない。こういったことが本当にどんなに自分の心を寂しくさせるかということ。それを10年前に感じて、私は今まだ一介のフリーランスであって、働き方の専門家ではないんですけども、もしかすると、人よりもちょっと早く仕事とか、働き方について真剣に考えるようになったのは、この個人的な経験からなのかなと思いました。

私は今、株式会社スプリーというマイクロ企業です、私ともう一人の社員だけの小さな会社をやっております。実態はフリーランサーです。時々書籍とかコラムを書いたり、大学で仕事をしたり、企業さんとか個人と契約して、新しい商品とかサービスを開発したり、コメンテーターやったり、色々な仕事をしています。そうした働き方を行うようになった1つのロールモデルがあります。これが次の写真です。

これは生まれたばかりの私と、そして母方の祖父です。おじいちゃんです。この2040年というお題をいただいたときに考えたのは、私はちょうど2040年、60歳になります。この祖父がちょうど60歳ぐらいです。もう祖父は4年前に他界したんですけども、彼は87歳でその生涯を終えるまで生涯現役で働きました。山形の小さな建設会社に高校卒業してから間もなく入社をしまして、そこで最初経理業務をやった後に、少しずつ営業の経験を積んで、最後は社長、会長職まで務めていきました。

この祖父、すごく面白い働き方をしていたんですね。ユニークだったんです。それは何かというと、本業の建設会社、つまり、個人の住宅だったりとか、リゾート地の開発、そういったものに関わる以外に、有志の人たちと一緒に「隗より始めよ一步会」というのを組織しまして、山形の朝日町という人口5,000人ぐらいの本当に小さな村の人間だったんですけども、そこで最上川の川下り大会だったり、花火大会、あるいはホップの畑を守るために特定のビールを愛飲して、それを応援しようといった運動、そういったことをやったり、そう思ったら、方言集を自費出版したり、自分で講演会を開いたり、色々なことをやっていく祖父でした。

実は、私の今の1つの肩書きとか、1つの会社、1つの組織に縛られない生き方の原点というのは、この60歳の写真は祖父なんですけれども、この祖父の働き方にその思いがあります。いただいたデータをもとに1つ抜き出してみたんですけども、私はこれをあえて抜き出したのは、高齢者と考えたときに、それを医療とか福祉の観点から守っていくというのはもちろん当然なんですけど、ただ、本当に自分の個人的な体験から祖父のことを思

い出してみると、祖父は60代、70代、そして80代になっても本当に元気良く、自分の才能とか、生命を輝かせて働いていた。何かその姿を見るにつれて、2040年、このデータにあるとおり、3人に1人が高齢者になっていく未来にはなるんですが、ただ、その高齢者の人たちを守ることだけじゃなくて、私たちが今から彼らを生かして輝かせていく。私もこの2040年高齢者に近い年齢になる。その1人として、それをすごく強い違和感を持ったので、このデータを出させていただきました。

もう一つ挙げたいと思います。2つあるんですけども、「2050年に人類の仕事は今の半分以下になる」という衝撃的な予測をイギリスのインディペンデント紙が挙げまして、ネットで話題になりました。あるいは、アメリカの名門大学であるデューク大学、ここの研究者が2011年にアメリカの小学校に入学した子供の実に65%は、大学卒業時には今存在していない職業につくだろうと、こういう予測を打ち立てています。ここから読み取れるのは、これは私を感じる事なんですが、起業というのは、ものすごく個人が生き抜くためのスキルになるんじゃないかと。というか、スキル、経験としてすごく大事なんじゃないかということです。下に書いているように、ロボットとか、そういった外注しやすい単純労働に仕事が取ってかわっていくということだけではありません。今、私たちが予想もつかない25年後の世界に予想もつかない仕事があらわれたり、あるいは予想もつかないような形で仕事が消えていくとするならば、起業というのは、どんな規模であれ、大小問わず、唯一才能とかアイデアに恵まれた人たちだけのものではなく、ぜいたくなものではなくて、仕事、会社で働いていても、シニアの方であっても、子供の人であっても、こうしたビジネスマインドとか、起業していこうという気概というのはものすごい大事になるんじゃないかと思います。

そして、ここから6つのキーワードを今回ご紹介させていただきます。高齢者をどう生かすかということと、そして未来予測に基づいて起業というもの、そうした精神が私たちに大事な、必要なスキルであるということに基づいて、この6つのキーワードを挙げてみるんですが、まず、1つ目が「マイクロ起業家」です。マイクロ起業家というのは、従来の日本人の考える起業とはちょっと違うような概念です。どちらかというと、どの商店街にも1つあるような、例えば布団が売っている。その隣にたばこを売っていたり、文房具を売っていたりというような商店街に1つあるような何々商店みたいな、そんなイメージです。スモールビジネスです。

こうしたマイクロ起業家というのは、イギリスの『ワーク・シフト』の著者、リンダ・

グラットンという女性の教授の方がいらっしゃるんですけども、その方が『ワーク・シフト』という著書の中でも紹介しているとおり、ウェブサービスとか、先ほど林さんがご紹介されたairbnbとか、Uberとか、そういった新しいサービスと結びついたときに、この〇〇商店からもっと世界とか社会に開かれた形でマイクロ起業家が誕生していきだろうと。それは私自身も自分の実践から感じていることです。

具体的には、ここに書いてある3つなんですけれども、サブの副業ではなくて、複数、マルチプルにやっていくような仕事。私の祖父のように、本業がありながら、自分の勉強会を開いたり、ものづくりをやったり、イベントを企画したり、そういったような感じですよ。あるいはピーター・ドラッカーが提唱しているようなパラレルキャリア、これを日本風にいうと二足のわらじということなんですけれども、2つ以上の仕事、2つ以上の組織に同時に所属していくことによって、その会社がたとえなくなったとしても、生き抜くリスクヘッジになる。それだけではなくて、1つの仕事とか、1つの組織だけでは見つけられなかった自分の才能とか可能性、そういったものに気づける素晴らしさもここにはあるんじゃないかなと思います。

2つ目は、「50歳定年制」です。ちょっとどきっとする方もいらっしゃるかもしれませんが、これは大前研一さんが最初に提唱されたことだと思います。私も著書の中で感銘を受けまして、ここで入れさせていただきます。私が常々感じていることと同じでしたので、入れさせていただきます。

これは、簡単に言うと、第二の人生をスタートさせていく仕組みです。具体的には、50歳になった時点で、これを全員にするか、それとも希望者にするか、その辺はまだ検討の余地があると思うんですけども、そうしたこれまでの築いた人脈とか、スキル、経験を生かして、例えば50歳から新しく若い人たちと協業してシニア起業、新しいビジネスに打ち出していったりとか、あるいはこの2行目に書いてありますけれども、日本マンパワー調べという2012年の調査によると、どうやら日本の50代の社員の方の実に4分の3、75%以上の人たちは、今の自分の就いている仕事にやりがいがないと感じているそうです。もしこれが多くの人たちにうなずいていただけるのであれば、そういった仕事に寄り添うとか、しがみつくといいか、はっきり言いますと、そういったことではない生き方もきっとあるはずだと私は思うんです。例えばそれが大企業であれば、より小さなベンチャーとか、中小企業にそうしたすぐれた人材が流入することによって活性化していく市場もあるんじゃないかなと思います。

そして、3つ目、これは4つ目に関わっていくキーワードなんですけれども、これはある意味でオンリーワン戦略です。「100万人中の1位になる」。100万人中の1位というと、恐らく国体選手とか、オリンピック選手とか、そういったぐらいの素晴らしさ、すごさだと思うんですけれども、私が考える100万人中の1位というのは、もっと身近なものです。具体的には、50歳の定年制までに、20代、30代、40代の各10年間で100人いたら、その中の1位が取れるスキルというのを身につけていくということです。それはIT、英語かもしれません。あるいはマネジメント能力かもしれません。こうした100人の中で1位を取れるものを3つ掛け合わせていくと、これは100万人中の1位になります。

そして、4つ目が「一生、学び続ける仕組み」です。「一生、学び続ける仕組み」、これは簡単に言えば、大学の講義のオンライン化、早くもアメリカの大学などが既に導入されていますが、あるいは大学の入試制度とか学費、そういったものも改めて見直して、どんな世代の人であっても、一生、自分のライフステージに合わせて学び続けていく仕組み、これをもう一度考え直してもいいんじゃないかということです。

そして、こちらです。これは100万人中の1位の考え方の支えになっているものなんですけれども、私はキャリアアップという言葉、これは実はあまりぴんときていません。もっと言うと、先ほど都知事が発言されたワーク・ライフ・バランスというよりも、私は個人的にワーク・ライフ・ブレンドというものが、これからの時代のキーワードになっていくんじゃないかなと思っているんですけれども、キャリアアップ、右肩上がりのようなずつと上を目指して、スキルアップとか、昇給アップを目指していくのではなくて、その人の、自分の関心とか、エネルギーの変化に合わせて、あるいはその人時々のライフステージに合わせて、もっと柔軟に自由に働き方、職業の選択を行っていく「キャリア・スライディング」という考え方、これもぜひ俎上に上げていただければうれしいなと思います。

そして、こちら最後です。細かいので簡単に言います。多様化するライフスタイルに合わせて、つまり、働き方にも合わせてサービスをより充実させていくことも大事だと思います。仕事、働き方は、それだけで決して完結するものではありません。例えばクラウドソーシングだったり、スカイプとかテレビ会議などをもっと発達させていって、会議を例えば10分の1に減らし、もっと場所とか時間にとらわれない働き方というのを、大企業をはじめ実現させていくこと。あるいは私のようなフリーランスには特に重要なことなんですけれども、仲間が大事です。コミュニティとか仲間です。そういったものを昔のギルドのようなものを今現代の形で復活させたら、一体どんな相互補助の仕組みになるのか、あ

るいは家事の外注もあるかもしれません。女性の進出のためです。そして、二拠点生活などといった地方の空き家の活用とか、東京の会社を地方に拠点を移していく動き、高速無線LANや、あるいは林さんがご紹介されていた新しいサービス、そういったものも一緒にぜひ働き方とあわせて検討していければいいと思います。

最後、再び祖父を登場させてください。祖父は、冒頭に申し上げたように、4年前に亡くなったんですけれども、私は祖父の葬式に出たときに、もう涙が止まりませんでした。その祖父が生前、私に繰り返し聞かせてくれた言葉に「進取の気性」という言葉があります。進んで取るの気性、「進取の気性」です。今風にいうと、起業家精神とか、アントレプレナーシップと呼ぶものだと思うんですけれども、この進取の気性を、DNAを受け継いだ一人として、そして2040年には高齢者の入り口に入る個人として、ぜひ今日は幅広い形で、今後もなんですが、働き方という観点で皆さんと色々な議論が深められたらうれしいと思っています。

本当に今日はこのような場にお招きいただきまして、ありがとうございました。

**【前田副知事】**      ありがとうございました。

続きまして、科学技術の分野でお越しいただきました松尾豊様より、ご説明をお願いいたします。よろしく願いいたします。

**【松尾様】**      松尾と申します。人工知能の研究をしています。人工知能、最近結構えらいことが起こってしまっていて、どういうことかというのをお話ししたいと思います。

僕は何で人工知能を研究しているかというのと、自分って何だろうと思うと。自分が見ているこの景色、この認識って一体何なんだろう。本当に実在するのかなど。こういう自分の認識って脳がつくり上げているわけですね。人間の認識とか思考というのは、全部脳がやっている。脳がやっていることというのは、脳の中というのは電気信号が行き交っていて、化学変化で若干つながり方が変わっていると。でも、やっている自体は計算なんです。情報処理なんです。情報処理なんだとしたら、僕、小さいころからコンピュータが好きでしたからプログラムをずっとやっていたんですね。情報処理なんだとしたら、何で人間の脳の仕組みというのがコンピュータのプログラムでできないのというのをずっと思ってきたんですね。そう思ってきた分野が人工知能という分野で、もう60年研究しているんです、人工知能の分野。ただ、60年たっても、まだ誰も人間の脳のような知能をつくったことがないんですね。何でなのかと。色々なことを言う人がいて、人間の脳は神秘的なんだと。何か霊が宿っているんだ、魂があるんだとか、そういうことを言う人もいます

けども、あまりそれが科学的な説明とは思えないと。とすると、何か理由があるはずなんですね。

僕はずっと長い間人工知能の研究をして思い続けてきたのは、結局、1個しか問題ないんじゃないかと。今までも人工知能の手法とかアルゴリズム、プログラム、たくさんできました。知能っぽい振る舞いをさせることはできたんですね。ところが、それらは全部どうやったら知能っぽい振る舞いをするかというのを最初に人間が考えているんですね。例えば交通のシミュレーションをしますと。交通のシミュレーションをするときに、車というのがあって、車というのはこういうふうに動くもので、道路はこうなっているという現実世界の現象から重要なところを抜き出すという作業を必ず最初、人間がやっているんです。その後、モデルができたなら、その後は自動的に計算させているんですね。何か自動的に計算できている気になっているんです。だけど、常に一番最初に現実世界から重要なところを抜き出す、注目する点を、どこに注目するかというのを決めるというのは、ずっと人間の仕事だったんです。それがゆえに自動で最初から最後まで計算できなかった。途中からしか計算できなかった。

ところが、これが変わりつつあるんですね。その技術がディープラーニングという技術で、画像認識というコンピュータのタスクがあります。画像認識というのは何かというと、写真に写っているものが、これがコップなのか、花なのか、あるいはヨットなのか、こういうのを当てるようなタスクなんですね。これはコンピュータはめっちゃめっちゃ苦手でした。できなかった。何でかという、画像を見たときに、どこに注目するのかというのを人間が一生懸命設計していたんですね。手づくりで設計していたんです。そうすると、どうやっても精度が上がらなかったんですね。

ずっと画像認識の精度というのは、一般画像認識というカテゴリーの話なんですけど、25%ぐらいのエラー率だったんです。つまり、100枚画像があると、それがヨットなのか、花なのか、猫なのか判定させると、25%間違うんですね。だからほとんど使い物にならないレベルだった。ところが、2012年にディープラーニングの手法を使ったチームが現れて、当時、その分野って1年間研究者が頑張ると1%ぐらい精度が上がるような領域だったんですね。それをいきなり10%ちぎって勝っちゃったんです。しかも、その特徴量の設計、どこに注目するかという設計を人間が一切やらずに勝ったんです。

それが2012年のことで、それ以降はとんとん拍子で精度が上がったんですね。2013年は11%、2014年は6.7%。このタスクを人間がやると、人間でも5.1%ぐらい間違うんです。



20枚に1枚ぐらい間違ふんですね。ところが、今年の2月にマイクロソフトは4.9%、それからグーグルは4.8%というのを出したと。つまり、画像認識の分野で、画像認識というタスクにおいて人間の精度を既に上回ってしまった。あと100年はできないんじゃないかという人もいたんですね。それができるようになった。

どういうふうにするかという、これは顔画像認識というグーグルの最新の研究の例なんですけれども、22階層のニューラルネットワークという、これもちょっと前までは3層以上にすると全然うまくいかなかったのが、今、22層になっているんです。22層のネットワークを使って、800万人の異なる人間の2億枚の顔画像で学習させると、2,000時間、3,000時間、2か月とか3か月で学習し続ける。コンピュータを回しっ放しなんですけれども、そうすると、精度が99.63%当たる。ほとんど間違えないです。これが誰なのかという認識を間違えないです。

間違える例がこれなんです。間違える例がこれで、例えば左上の2枚の写真がありますがけれども、これは実は違う人物なんですね。違う人物なんだけれども、同じだと言っちゃったと。人間が見ても、結構わからないですね。今度、逆に同じ人物なんだけれども、違う人物だと言っちゃったという例がこれで、左上の人なんかは、ほかの人が後ろに映り込んでいるからわかるにしても、左上から2番目の人は結構昔の写真だなとか、あと左下の人は、多分役者さんで、違う役柄を演じているんですね。右の行の下から2番目の人はつけ鼻をしていて、鼻が違うんですね。鼻が違うものを同一人物だと言われても、それは人間でも見分けられないよねということで、ほとんど人間が見てもわからないぐらいになっていると。この画像認識は、そうするとこういうふうにならなくなった映り方をしている、同じ人をクラスタリング、1つのグループに分けているんですけれども、完全に分けることができるんですね。もうここまで来ている。これは現実の技術なんです。

Marvin Minskyという人工知能の非常に有名な人は、子供のできることほどコンピュータにやらせるのは難しいと言っていました。先ほど小堀さんのほうからあったような五感とか、動きとか、こういうのは子供にはできるのに、コンピュータは一切できなかったんですね。ところが、画像認識もその典型的な例だったんですけれども、それがこんな短期間でできるようになったと。何でかという、最初に僕がお話ししたように、現実世界から何を取り出すのかというのをみつける技術ができたからなんです。

そうすると、色々なことができるはずで、ちょっと動画をお見せしたいと思いますけれども、Deep Mindというグーグルが400億円で買収した会社がありまして、こういうブロッ

ク崩しのゲーム、これを学習するプログラムです。今までもできたんですけども、何が違うかという、画像認識させているんです。画像認識して特徴量を取り出した上で、点が入るような状況を強化するんですね。強化学習と言いまして、報酬を与えて、報酬が与えられるような行動を強化していくと。動物でも一緒なんですけれども、そうやっていくと、どんどんうまくなるんですね。このプログラムに与えているのは、ゲームの画像のデータとスコアだけなので、基本的に同じプログラムで色々なゲームがうまくなるんですね。すごいのは、やっているうちに、だんだん左端を狙うようになるんですね。やったことがある人はわかるかもしれないですけど、左を狙うと、こういうふうに入りますね。これをやっている。

では、ここまで来たら、これをロボットに適用したらどうなるのと。試行錯誤することによってうまくなるんじゃないという、これをUCバークレーが今年5月に出したんです。どういうものかという、こういうふうにロボットがおもちゃの飛行機に組み込むというのを試行錯誤でやるんですね。入力はさっきと同じで画像です。これがはまり込むと報酬がもらえるというふうになっていると。そうすると、何回も何回もトライして、だんだんうまくなるんですね。こういうふうに入れられるようになると。これも今までロボットだったら、完全に0.何ミリ単位で動きを設計してやらないとできなかったのが、こういうふうな人間の子供っぽい動きですよ。やっているうちに入れるというのができると。

どういう行動によって報酬を与えるかを決めれば、色々なものが学習できるようになる。こういうふうを組み立てるというのも従来のロボットだとほとんどできなかった。こういうのを入れたり、あとこういうふたを閉めるというのをやっているんですけども、よく見ると、1回逆方向に回しているんですね。人間でもそういうふうにすると思うんですけども、これと同じようなことを日本のプリファードインフラストラクチャーというところがやっているんですけども、もうここまでできていると、この先本当に色々なことが起こってくると。

産業社会に対して非常に大きなインパクトがあって、例えば、今のような画像認識ができると、お医者さんの画像診断って恐らくトップのお医者さんと同じぐらいの診断精度になるはず。それから、あれだけの顔画像の認識ができれば、セキュリティー感度なんて要らないですよ。顔を登録しておけば、この人は入っていいよと。このフロアは入っていいよと。この人はだめと。それから最近だと、アメリカのマスターカードが顔で決済するというのを出したんですね。だから、顔写真を送ると決済されると。ここまで来ると、例

えばお店の中に入って行って、適当に品物を取って出てくると決済されていると。誰が何を取ったかというのがわかるから決済されていると、そうなるかもしれない。

それから、防犯とか監視も、これも特徴量の生成と非常に関係しているので、何かおかしいということがわかるようになるんですね。そうすると、犯罪とかが非常に減る可能性があるんですね。今の監視カメラは結局、最後人間が見ていないとおかしいことがわからないので無理だったんですけれども、それが監視カメラにこの人工知能を付けておけば、変なことが起こって、不審な行動ってわかるので、犯罪事故をほぼゼロにできる可能性がある。これは、僕は技術的に変なことを言っているんじゃなくて、ほぼ実用できるレベルにあるんですね。という変化が今起こりつつありますよと、相当大的な変化なんですね。

僕は、最後に、日本はこういった新しい技術で世界と戦って、もう一度経済成長、経済的な発展を取り戻してほしいと。ここに書いてあるようなことはすべて製造業と関わっています。日本が強いんですね。日本は、僕は色々な意味で人工知能に関して潜在的な力があると思いますし、何とか明るい未来を2040年につくりたいなと思っています。

ありがとうございます。

**【前田副知事】** ありがとうございます。

短い発表時間にさせていただきましたが、大変中身の詰まったご意見、ご提言をたくさん頂戴いたしました。本当にありがとうございます。

次に、意見交換に移りたいと存じます。東京都側出席者と有識者の皆様という形だけではなく、ぜひ有識者の皆様同士でも、ただいまのご意見、ご提言を基に活発にご議論をいただきたいと思います。

ご発言の際は、卓上マイクのボタンを押してご発言をいただければと思います。ご発言がございましたら、ぜひよろしく願いいたします。

**【舛添知事】** 大変ありがとうございました。何かのきっかけということで申し上げて、ちょっと感想的なことだけ申し上げますと、藤村さん、馬場さんから色々な都市計画のような観点で仰られて、例えば公園について、今、規制緩和をやって、駒沢公園に新しい、もう少し駄菓子屋ではなくて、おいしいものないのかと言って、今、民間にオープンにする。駒沢公園に保育所とか老人施設を公園の中につくるというようなこともやっています。それで色々な、朽ちる東京ということでインフラの整備は、これは30年計画ぐらいであらゆるところで変わっているというような状況をつくろうかなと思っています。

それから、林さんたちからairbnbの話が出まして、結局、2020年もあるので空き家対策

というのは非常に大きくなって、要するに医療や介護のベッドが少ないから東京から地方へ出ていけと。出ていけと言うけど、そんな簡単にできませんよと。例えばマイホームというのをずっと持ち続けるという政策をやってきて、できるわけじゃないかと。そうすると、空き家をどうするかで今色々な問題になっているんですが、例えばairbnbのようなことをやろうとすると、これは我々の政治の世界なんですけれども、旅館業組合が反対するわけですよ。そうすると、逆に言うと、谷中の旅館などは、むしろこれをやったほうが活性化すると思うので、さっき言った個みたいな概念がそこに来るんだろうと思っています。

仲條さんの人材を上手に活用するというのも、少し夢を追うような観点があっていいというのは、そのとおりだと思いますし、それから、久野さんのほうの運動不足をどうするかということで、私、今モータリゼーションからディモータリゼーションということで、日本橋と丸の内の仲通りを全部歩行者天国でやろうということをやっているの、これをちょっとやりたいなと思っています。

それから、私は、お茶は日本文化の象徴だと思っているので、6月6日にするかどうか、一斉にみんなでお茶を飲む日を、立てる日にやるというようなこともあると思いますし、働き方の問題もブレンドという話が出ましたけれども、先ほど広重と伊能忠敬の例を出したのは、どなたかが二足わらじって、安藤さんが仰ったのかな。そういうことがあっていいので、ゆとりがある社会というのはそんなものだというような感じがしています。

それで、最後の松尾さんの人工知能で非常に日本の可能性があるということで、まさに25年後とか30年後を考えたら、どうなっているのだろうかと思うんですけれども、これをグランドデザインを考えるときに、どういうふうに活用するのかというのはちょっと不明な部分もありますけれども、今、色々な方が仰られて、特に情報公開、情報共有の話は、結局そのほうが勝つんだ、というのは新国立競技場を見ればわかるので、あれ何で失敗したかというのは、情報を出さなかったから失敗したので、あらゆるレベルで出しておけば、みんなそこにジョインするという感覚が生まれると思うので、今日皆さん方にお話しいただいたのは、今から議論しますけれども、大変素晴らしい方向付けをいただいたのでありがたいなと思っています。

以上です。感想だけ、すみません。

【前田副知事】      ありがとうございます。

どうぞ、ご意見、ご質問、何でも結構でございます。

お願いします。藤村様。

【藤村様】 今日これだけ言って帰ろうと思ったのは、何で新国立があんなにもめてしまったのかというのは、あれをオープンでやらなかったからではないでしょうかと言おうと思ったら、今知事に言われてしまいました。

私が思うことは、林さんや馬場さんも仰るように、オープンデータですとか、それによってイノベーションということに関して言えば、まちづくりの現場でよく言われていることですが、例えばああいったものが、今、公開されている公共施設白書と何が違うのかと。白書も公開されているし、遊休資産だって公開されているし、それを何も公開されていないわけではないんですけれども、問題は、そこにイニシアティブをどうデザインするかとか、プロジェクトをどうデザインするかという、そういう仕組みがなくて、それが意外と難しいわけですね。

ですから、全国の基礎自治体だって白書は公開しているけれども、そこで止まっている。インフラ老朽化対策とか、財政改革をしたいと思っても、それが進まない。数値目標は出るけれども、その先が進まないというときに、何か空間設計ですとか、施設整備に絡めた都市設計とか空間設計の概念が必要だと思うんですけれども、その意味においてはオリンピック・パラリンピックというのは非常によいプロジェクトだと思うんですね。

その後でございますが、より難しい構造改革、ブルームバーグでいうと、用途地域を40%も書きかえて実現しようとした住宅政策のようなことが東京でも恐らく必要になってくるだろうと思われるときに、例えば公共資産ということ言えば、建築施設で言えば、小学校施設というのは非常に多いわけですね。その小学校の再配置ということに関しては利害が非常に対立するので、これをどのように合意形成して前向きに進めていくか。

今、都知事が仰ったように、オープンなプロセスで地域のイニシアティブをうまく引き出す仕組みが必要なんですけど、現状ではなかなかどの自治体でも計画が策定されてから、ようやく意見交換なんです。計画の検討段階で「やわらかい検討」というのをどうするかということに関して、これはより積極的に都として取り組んでいただきたいと思っています。

私が今取り組んでいる例で言いますと、例えば、まず庁舎の中で、教育委員会の中で先生方と合意形成をやって、それから教育関係者と合意形成をやって、それから市民の方に開いてとか、色々な段階を踏んで学校の再配置をどうするかという討議をやったりするんですけれども、そういう色々なレベルでの具体的な問題をどう解決するか。先ほど申し上げ

げたオープンイノベーションとか、リパブリックというような理念を実現するには、そういう施設整備のような、わかりやすい目に見える施策と財政改革とを結びつけることが重要だと思っていて、今日の並び順でいうと、私は一番最初に発表させていただいたんですけども、本当は馬場さんの後で、久野さんの前みたいな順番でいくと、私の発表は、例えば「遊休不動産の活用」ということと「健康増進」ということを結びつけるご提案に聞こえたはずなので、そういう政策的に横断するプロジェクトをぜひ議論していただければというふうに思っておりました。

【前田副知事】 ありがとうございます。

【舛添知事】 どうぞ、自由に。

【前田副知事】 では、仲條さん、お願いします。

【仲條様】 今の藤村さん仰った点に通じるところもあるんですが、考え方をまとめていくというのは時間もかかるんですが、スピードというのがすごく重要だと思うんですね。そのスピード感を持ちながら、全ての人たちに情報を公開していくためには、やはりテクノロジーをちゃんと入れていかななくてはいけないところもあると思います。なので、それをどういうふうに進めていくかということが1点。

それから、2点目は、ニューヨークの、こちらちょっとグーグルという立場ではなく、個人的なことで申し上げますと、ナインイレブンがあった後に、どうやってまちに人を、また企業を持ってくるかと、ファイナンスの拠点として生きていくかということをマイケル・ブルームバーグが考えたときに、その後、まず製薬会社やら何やらというある程度ターゲットを決めたんですね、ご存じのことかと思うんですが。そこに対して世界中を回ってロードショーをしたんです。拠点をニューヨークに移してくださいと。そのための当然ながらインセンティブも起こすんですが、それを東京都も同じようにビジョンを持って、こういうような企業にここに来てもらいたいと。彼らは何を求めているのか。例えばもしかしたらボーディングスクールのような優秀な学校をつくるということかもしれない。それを持ってくることによって優秀な人材が移ってきて、ファイナンスの起点になるかもしれない。やはりシンガポールがどうやったら金融の人たちをシンガポールに持って来るとかやったりしたときに、日本の企業を回って、どれぐらいタックスを払っているんですかということをやってきたんですね。なので、非常にセールスマンみたいな形のオーナーシップを持って行政と一緒に民間がやっていく必要があるんじゃないかと思います。この2点を。

**【前田副知事】** ありがとうございます。

久野様、よろしくお願ひします。

**【久野様】** 今日はありがとうございます。ずっとお伺ひしていて、日本という国のイノベーションがなかなか起こらないということが何故なんだろうということをずっと問題意識に挙げながら、今日、これだけ色々な事例が起こっているのですが、それがなぜ全体に広がらないんだろうか。その辺を解いていく必要があるなと思ひながらずっとお伺ひしていました。

先ほどお話ししたフライブルクが車を止めたまちは、当時、環境対策の為に実は45年前につくられているものです。これが今、我々は特区を活用して23年度から日本の各地でやろうとしているのですが、大きなエネルギーを使うんですね。自治体の方が、例えば新潟市で3年がかりでライジングボラードという車を止めるために自動的に上げる仕組みを道交法で実施できなかったものを、日本で初めて公道で新潟市と導入しましたが、その担当者の方の多大な努力を考えますと、もうその担当者はやりたくないかもしれません。この辺に一つ日本の規制、そこの課題をどうやっていくのかという問題と、もう一方、規制の問題、国民側にも問題はあるのだと思ひます。今の現状を変えていくということに対して非常に抵抗感があり、では、なぜそこを国民がついてこないかということになります。

例えば、今日の話聞けば、こうすべきだとわかるのですが、そういう情報が入っておらず、リテラシーという面で今の生活しか見えておらず、これから変わる、10年後、20年後何が起こるかということ普通は知りませんので、住民投票など、判断になると、今の情報だけでみんなが決めていくということになります。この辺りはいかに情報を、先ほど挙げた無関心層に届けるかということをやっていかなければ、せっかくいい政策を色々な自治体が僕は組まれていても、それに時間がかかったり、成功しないところの結構根幹のところを実はあまり手をつけてこなかったのではないかと考えています。情報公開していますと言っても、見ている人が限られている。この辺の本質的な問題も考えていく必要があるのではないかなということをお今日改めて感じさせていただきました。ありがとうございます。

**【前田副知事】** ありがとうございます。はい、どうぞ。よろしくお願ひします。

**【馬場様】** 僕、今日RePUBLIC TOKYOというかけ声みたいなものを提案させてもらったんですけども、ハッピーな写真ばかり見せましたが、あれを実現するためにもものすごい規制との戦いがあります。もう本当に。ただ、それを僕は批判していても仕方がないなと。

先例社会だから仕方がないというふうに思っています。ただ、今日の会議だけでも、例えばグーグルと組んでリパブリックマップみたいなのをつくって、そこにアイデアをどんどん投稿していくようなことができないかとか、RePUBLIC TOKYOの枠組みの中で、銭湯とか、泊るとか、東京のステイに新しい可能性を提案するようなことができないかとか、それこそ歩道橋をリノベーションするとか、福祉と一緒に考えられないかとか、ばんばん、ばんばん上からかぶせていける気がしたんです。

ハッピーを表現していくことが、もしかすると一番素早い民意形成なのではないかというふうな、ちょっと楽観主義的かもしれませんが、その構図をどうやってつくるか。ハッピーを提示して、それを実現するためにどうすればいいのかということ、まずハッピーを共感、合意形成した上でどうするかとやった瞬間に、行政の人も考えやすいのではないかというような気もするので、何かそういう枠組みが、このタイミング、この機会にうまくつくれば、ちょうどオリンピックもあるし、みたいなことを思ったりして聞いておりました。

【前田副知事】      ありがとうございます。

【舩添知事】      どうぞ、まだ仰っていない方。

【前田副知事】      どうぞ、松尾様、お願いします。

【松尾様】      他の方の発表をととても興味深く聞かせていただいたんですけども、僕は人工知能という観点から色々捉えると、すごいできることが多いなど。まちの中で人々がどう暮らしているのかということのも恐らくデータとしてとることができるし、人工知能が把握することができる。だとしたら、ここの道路は子供が渡っていて危ないよねとか、ここの陸橋ってほとんど使っていないよねとか、ここの道ってみんなが走っているから公園にしたほうがいいんじゃないのか、そういうこともわかると思いますし、それからここの橋、古くなっているかもしれない。ここの道路が何かおかしいというのもわかるかもしれないということで、設備の保守とか、まちの暮らしとか、まちの使い方というのをデータとしてとりながら発展させていくと。僕は、こんなに世界の中で高密度で、しかも色々なところにカメラがあったり、データがとれるところがこんなにたくさんある。こんなまちってなかなかないと思うので、それを安全で暮らしやすいまちにつなげていくというのは、すごく可能性があることじゃないかなと。

それと同時に、人工知能が進めば進むほど、人間って何なんだろうというところを考えないといけなくなって、人の文化、東京の持つ文化とか、人が輝くような働き方って何な



んだらうというところを、もう一方の極としてちゃんと考えていくというのがすごく重要なんだなというふうに考えさせられました。

【舛添知事】 安藤さん、小堀さん、林さん、どうぞ。

【小堀様】 今、松尾先生が仰ったみたいに、私もすごい追求していったら、今の東京は技術の進歩だったり、様々なことが進化していくと思うんですね。あらゆることがロボットでできるようになったとき、そこで人間との違いって何なんだろうかと考えたときに、やはり五感を感じることもだったり、日本人というか、私たちが人間であるためにはどうしたらいいかと考えたときに、そこは日本文化の力なんじゃないかなというふうに思っています。

技術の進歩やロボット、もちろん後期高齢社会になる上でリハビリなど活用される部分があると思いますので、そういう進歩に関しては止める必要もないですし、勝手に進んでいくものだと思っています。だからこそ立ち返ってみて、私たちが人間らしくあるためにはどうしたらいいかという部分で日本文化を感じる場所を絶対につくるべきだと考えています。

あとは、情報共有という言葉が先ほどから出ていますけれども、元々お茶室というものは内密なお話をするような、そういう空間でした。今はメールとか電話、インターネット、サーバーなど、色々な場所で情報を共有できると思いますけれども、やはり文字で共有することと、人と人が対話することではニュアンスが必ず変わってきてしまうと思います。歴史ある地球で人と人が対話するところから始まっていると思います。なので、技術進歩に伴い、色々なものに頼りたい部分はあるんですけども、最も大事なものは人と人が対話をすることです。このような場をつくっていただいたのもとてもありがたいことだと思いますし、人と人が直接に会話をするという場が情報共有の最も大事なところだと思っています。

【前田副知事】 ありがとうございます。

林様、お願いします。

【林様】 ロボットの話で、これからどんどんロボットが入ってくると思うんですが、ロボットを見たことがないと、ロボットに人間の仕事が奪われるといったような概念があるんですが、ちょうどカフェに昨日からロボットを置いているんです。人間の目に合わせて顔が動く子供のようなんですね。私、それを見たときに、犬と人間の間の人種の線を引く必要がない。それをさらに遡ると、今、性別が男と女だけじゃないと。要は、体は男

だけど、心は女だったり、さまざまな、男と女という二元論というものからスペクトラムになるというのと同じように、子供がいない夫婦が犬をかわいがって、「うちの子」と言うときに、それは犬なのか人間なのか。そこに線がないのと同じように、ロボットが「僕の頭触って」って、触ると喜んでやって動いてくれたときに、やはりそこに人間とロボットの線さえも必要がない。

つまり、概念で色々なことを議論すると、先ほどの歩道橋も、歩道橋はどんなのかという概念で考えるとどちらもあって、どちらも決まらない。でも、重要なのはこの場の、例えば渋谷のスクランブル交差点の中で渡るのと、歩道橋、どちらがいいかという個別の中で使う人たちがどちらかを選び、でもそれは選択じゃなくて、歩道橋を渡るときには人が支えようねと。だから二元論が多分大きな色々なことの間違いで、そこがさまざまにつながっていくと考えたときに、今言っているオープンデータとか、リパブリックも、データとかレイヤーを整えるのは簡単だと思うんですけど、実行のルールが一番難しいと思うんですね。そこが、私は思うんですけど、全体ルールを先につくるのではなく、小さなプロジェクトでしか実行しない。

それから、行政の人が一番大変だと思うのは、1個でもクレームが来ると、1万件の形になっていない喜びを生んでいるのに廃止しなければいけない。だからこれから新しいイニシアティヴをやるときに、クレームが来たら、そのクレームに合わせて、それはフィードバックとして聞くけれども、それ以上の99%の喜びを消すような政策をとらない。だから1件のクレームは1件に対応するのであって、全体ルールに反映させないといったような、すごくシンプルなイニシアティヴを実行するルール、事前パーミッションは要らない。クレーム1件で変えない。99%の人を幸せするといったような三原則ぐらいで実行することで、本当に生きたプロジェクトが生まれてくるんじゃないかなと思っていて、実行のルールを設計したいと思いました。

**【舛添知事】** あと安藤さんですか。

**【安藤様】** 議論とか意見ではないんですけども、舛添都知事にぜひ聞いてみたいことがありますて、というか、お茶飲み話みたいなものなんですが、働く楽しさってどうやったら感じるができるのかなと思うのが、私は本を書いたり、毎日ツイッターとかブログとかフェイスブックをやっていますて、毎日のように会社をやめたいとか、疲れた、眠いとか、そういうことがネットにあふれているのを見るにつけ、特に私はそういった過去、仕事でペしゃんこになった時期もあるので、そういった声が多いのかもしれない

れども、拝見していると、すごく生き生きお仕事されているように見られるので、ぜひ私に一つお言葉をいただけたらと思ひまして、ぜひお願いします。

**【舛添知事】** 今日のように皆さん方と楽しくやれると、それが非常にうれしいので、要するに頭を刺激することが欲しいなということぐらいで、ただ、これとこれは嫌でもやらないといけないものというのはあると思うんです。ただ、私は色々な趣味が多いので、自分の商売は東京都知事なんだけど、家へ帰ったら物を書いていることもあるし、本を読んでいることもあるし、絵が非常に好きなものですから、恐らくこの中の誰よりも絵については一番私が知っているだろうと思いますというようなことがあるので、ゆとりを持つというのは、要するにこの仕事でなければ生きていけないなんて思ったことはないのですが、そのときまた、いい加減な人生を過ごしてきたので、つまり、これどこかで言ったんですけど、学者仲間で、みんな学者で最後まで東大の先生をやっているというのは偉いなと思って、私みたいに途中でドロップアウトしながら、こんなところまでと言ったら変ですけど、来たというのはちょっと例外なので、あまり例にならないと思います。

それで、もう1点だけいいですか。仲條さんがシンガポールを例に出されて、実を言うと、都市の競争の中で1位ロンドン、2位ニューヨーク、3位がパリ、4位が東京、そして5位がシンガポール、その次がソウルなんです。いつもシンガポールと比べられるのは英語なんです。それで、私は今、Back to Tokyoということで、シンガポールにある金融センターをこちらに持ってくると。だから日本橋に今、東京フィナンシャルセンターというのをつくって、それから薬も、アジアの薬づくり、医療機器も含めて、そのメッカをやはり日本橋に集積して、そこに持ってこようとして色々な仕組みをやっているんです。そのときに最大の問題は、もちろん法人税もあるんだけど、英語ということが来るんです。そうすると、さっきの松尾さんの話の最後に英語、言葉は問題ないということなので、だから松尾さん、解決策はありますか。それから、仲條さん、今の私のコメントに何かご意見があればと思います。

**【松尾様】** 翻訳というのは、多分、2025年から30年ぐらいにできる可能性が結構高いと思うので、そうすると、あと15年ぐらいで言葉の問題は技術的に解決する可能性もあると思います。

**【仲條様】** そうですね。私どももそう思っておりますし、プラス未来学者の人に先月、それこそニューヨークで聞いたんですけど、やはり教育は言葉とか、色々ありますけれども、答えを出す力じゃなくて、質問をしていく力、答えというのは至るところにあるので、

それは機械がやってくれるだろうということも1つ付け加えさせていただきます。ただ、その間の15年間、英語というのは本当にチャレンジだと思うんですね。正直。

**【舛添知事】** そうなんです。だから今、2020年のオリンピック・パラリンピックを目指して、みんなに英語を勉強してボランティアになってもらうというようなことをやっているんで、ちょっと一番、ニューヨーク、ロンドン、もちろん英語ですね。シンガポールもそうです。ソウルももっと我々より話せます。パリだって、私が留学していたころはフランス語しかしゃべれないのに、今、商売にならないから、みんな英語をしゃべるようになっていきます。恐らく一番英語をしゃべれる。今の6つのトップの都市の中で、一番少ないのは日本だと思っていて、それがハンディなんです。だから金融機関のヘッドクォーターズはシンガポールに逃げていったということなので、そうすると、この前こういう会議をやったときに、他の会議も全部英語でやりなさいと言われて、みんなちょっと顔を見合わせたんですけどね。何かアイデアありますか。

**【林様】** 私は英語力の問題じゃないんじゃないかなと思っていて、インド人の友人と話していると、英語なのかインド語なのかわからないような英語で、本気で自分は完璧な英語を話しているように話す。日本人は、「本当に話せないんです」と言いながら、話しをさせると結構話せる。これをメディアラボで研究したときに、1人ずつセンサーを付けてどういうふうにコミュニケーションをやるか。アメリカ人が当然話す。インド人が話す。日本人は話さないということが可視化される。毎日フィードバックしたときに、3日目に、実は日本人の発言が議論をファシリテートするのにすごく重要だというフィードバックがかかり、アメリカ人、おまえ話し過ぎだと。コミュニケーションになっていないということをやっていたときに、最後に、6人ぐらいのグループの中で、議論をうまくリードしていたのは日本人だったんですね。

だから、それは英語力の、日本人だけの中で英語で話してもだめだと思っていて、それが実はairbnbとかの政策にもつながってくるんですけど、要はコミュニケーション力なんですよね。英語の発音でもなければ、だから慣れていけば、別にpen、water、needぐらいでもできるわけで、その経験がないから、全部がつながっていないとできないと思って、私はああいいうairbnbとかの面白さというのは、全然airbnbとビジネスは全く関係ないんですけど、個人の家にどんどん海外の人が入ってくるのが真のグローバル人材で、日本、東京は留学させなくて結構です。なぜなら200万人、留学来てもらっていますからという、そういう新しい概念でやったときに、全然ちゅうちょしないで話しするようになってくるん

じゃないかなというふうにも思うんだけどね。そういうのは結構早い気がします。

【舛添知事】 時間になりましたね。すみません。

【前田副知事】 話は尽きないところで、大変貴重なお話をいただきましたが、もうこの辺が限度となりました。

本当に本日は、皆さんお忙しいところ、ありがとうございました。

知事、ご挨拶は。

【舛添知事】 一言だけ申し上げます。本当にありがとうございました。またこういう機会を持ちたいと思いますし、お互い色々な刺激を受けたと思っていますし、政策の面でも生かしていきたいと思っていますので、この次は小堀さんにお茶でも立てていただきながら、そういうのをたしなみながら、また話ができる機会をつくりたいと思っていますので、今後ともよろしくお願いします。本当に今日はありがとうございました。

— 了 —